

冬至のこゑちらほら聞こえ白菜漬
椅子の背に冬至日暮の日が斜め
午後からは雪の見込みの空見上げ
数え日の健康番組ふむふむと

奥塩原 新湯温泉

連泊の部屋散らかして雪籠り
小雪類にあたる感触懐しや
七種の出湯呆けなる夜を更かす
夜は星のチカチカ凍る氷柱宿
七種の夜ももう更けた目をこする
雪鎧ふ山の木は皆蛇の性
シンホニー奏づる如し崖つらら
噴火口囀づるごとし雪の朝
氷柱長短シンセサイザー奏づごと
氷柱に噉一ト日の晴れを約すごと
朝餉の座異口同音に雪のこと
連泊の湯中りの髭撫づれば雪
湯中りにらくだの股引剥ぎにけり
薺の夜髭をたたいてあたりけり
玄関脇雪搔用の竹箒
ふらふらと湯中りに似て舞ふ雪も
磐の剛氷柱の垂直谿明くる
小雪舞ふ穹に噴煙紛れ込む
大きくさめ又入れれば佳し山の出湯
湯の郷の上に湯の郷深雪晴れ
倒木に雪寒林のありありと
餅腹を暫し伸ばして貉の湯
温泉神社雪解雫を聞くばかり
雫して光芒放つ氷柱宿
枯るゝ山雑木愚直にたて込みて
雪林の仔細旭を取り込みて
鳥翔つごと雪林のしづり雪
画家たらんおもひ雪山前にして
熊笹の雪にへこたれゐる姿
軒つらら落として宿の朝支度

雪山を廻してへヤピンカーブなり
宿木に奥塩原の凍みっ晴れ
雪捨つる雪気に頬の鳴るごとし
北面の枝のびやかに冬木鳴る
雪林より雪林が見え谿向ふ
雪上をドドと車の鎖音
雪ありて一枚岩は翳を生む
枝々の雪も睡りに就く湯宿
雪林を迂る日差しは野兎のごと
車降りすつくと佇てる氷柱宿
共同湯すつと吹き込む隙間雪
雪はたく音のばたばた共同湯
覗きゐる湯宿の軒の太氷柱
噴煙の翳雪上を這ひまわる
煙ほくとほくと飛雪の湯花畑
共同湯木目がうれし宵の雪
脱衣場にすうすう通ふ隙間風
湯小屋の高窓冬青空に覗かれて
吹き込める雪気湯小屋の高窓より
脱衣場で湯ぼてり覚ますおらが春
共同湯氷柱ずんぐりむっくりと
雪女楚々とうち過ぎ旋風
雪林に小雪道草してをりぬ
つららつらら隣のつららみて育つ
ざうざうと頭の冴ゆ山の粗き湯に
フロントの鍵棚に鍵三日かな
フロントに辺りを払ふ鏡餅
熊笹の吹き折れ青しけもの道
関節の節々温め三日の湯
松はもう日暮の蒼さ山の雪
雪山の松暗緑に昏れかかり
なるやうになるさ余生も湯中りも
雪中のむじなの湯出づ貉貌
雪あかり出湯沸々湧くばかり
雪を来し手足じんじん貉の湯
長靴のドタ雪払ふ共同湯
根雪踏み来し足伸ばす共同湯
初春の出湯のラドン含有量
湯上りの牛乳昼の雪見つゝ

湯小屋出づ頬を掠めて朝の雪
融雪に出湯湯宿の長ホース
雪あかりほのとホテルのロビーまで

塩原温泉

温泉まんじゅう茶を淹る音や昼の雪
買初めの温泉まんじゅう湯気立つやつ
国訛りの旅人同士足湯して
赤松の剥落の雪根方搏ち
正月の川央みどりがかかる岩
飛び初めの川鶉編隊川上へ
かるがもの遊ぶ三日の川瀬かな
ざうざうと三日の水を被る岩
上流へ川鶉編隊一目散
雪搔いて橋より落とす男かな
正午指すロビーの時計昼の雪
箒川雪を払ひて崖の松
酔狂な雪に合ふべく露天風呂
渾身の雪搔き橋に人の現れ
枝々に雪餅花の如きを載せ
牧場の柵囲ひ込むなり新の雪
松林貫き雪気たつ径
涸れ川の流れ道草してみたり
湯壺より狐のやうに首出して
老人に優しき山の雪明り
爪切と楊枝携え初旅へ
ガリガリと雪搔きの音湯町昏れ

妙雲寺

六花めく犬の足跡雪の墓地
噓して三浦高尾の墓のうら
雪しづる寺に葬あり松の内
観世音扉を閉じて雪籠
新（さら）の雪窪めて神の杉木っ葉
観世音念じて溶かす堂の雪
雪中に赤らむ冬木の楓の芽
三楹や観音さんは堂籠り

雪の下黒土あらん牡丹の木（ボク）
雪化粧水のしたたる常夜燈
雪を載せ窓辺の八つ手大傾ぎ
裏白の縮れて風に鳴る六日
通勤の靴音迫る戛々と
淑気立つ穹見渡して富士の位置
鈴懸の実の黒々と朝雀
雀らに活気づく街四日かな
雀鳴き御用始の朝の街
著重ねてらつきよの如き厨妻
釣堀が賑はってをり松の内
鴨と杭二日の水にたゆたへり
小じんまりしてゐて風の鴨の陣
荒川を遡る眼に鴨拾ふ
六日の鴨六日の川鵜見上げをり
冬帽子似合はぬと決めはや六十路
陰雪がゾクツと端山に近き畑
筑波山三日の雲をぼんと置き
ひつじ田に筑波嶺据えて白日差し
鶏頂山秀ずる雪の白とさか
敗荷の痩せ脛折れて痛々し
雪被ぬ山雪負ふ山を後ろ盾
大穹に鶏頂山の白とさか
煎餅のほふ三日の車中かな
百葉箱雪舞ひ初めて盲ひけり
うち払ふ軒の氷柱や寒の入
手締めして六日の東京証券場

冬帽の温さは知らず頑固者
毛バ立ちて木蓮の苞日を返す
会場にマスクの市松模様かな
肝心な話はマスクとつてせむ
松とれて雀ら袋小路抜け
装いをめいめい凝らす冬木の芽
刈り込んでたん瘤だらけこの冬木
ごりごりの椰の木寒風晒しかな
マスクして睫毛に風を受けてゆく
松過ぎの風を捉えし磯とんび
湯小屋まで熊笹の径水つばな
独り言云ひては木の芽見比ぶる
切り裂くこゑ何處かでしたり春の鴝
物故俳人
巨人逝く年そこここに大き穴
喇叭水仙汝が吹かねば来ぬ春ぞ
喇叭水仙羅馬は意中の都にて
縁側の布団に吸はす海辺の陽
千両の色づきの佳くことし又
風邪薬もつたいなくも剩りけり
福袋ならぬ三日の風邪薬
鳥影は大柄にして春の鴝
干支年の男ならでは鬼は外
鶴鴿に明けくる年のさえざえと
冥界への近道夕べの雪林は
松過ぎの眼鏡買替へねばとおもふ
肌着に首するりと通し迎ふ年
俳句年鑑を読みて
殻付の岩牡蠣のよな論評よ
松過ぎのコンソメスープ胃に優し
鉛筆の整理机上に初日影
あらたまの石鹼（しゃぼん）を逃（のが）す共同湯
初刷に染まりぬかと両掌みる
臘梅に今は見頃と云ひ聞かす
初刷を鳴らして側に妻が居り
返信を一日延ばしいたちはぜ
わが町の航空写真初刷に

脱衣場で蚤など貰ひ来やせぬか
大とんど汐風受けて焔が倒れ
凧の糸放物線といふはこれ
舞台裏覗かるごとし枯蔦は
断ち割れば林檎の蜜の片寄れる
雪折れ竹大往生の里景色
結氷湖足踏みをして暖をとる
寒木瓜の人目引くいろ際立ちて
寒木瓜のわが眼放さぬ二三輪
数え日の朝の日に舞ふ綿ぼこり
重のもの奥歯に鳴らす大旦
冬帽を拒み続けてはや六十路
湯ぼてりの股引痒くなりて脱ぐ
会津出の妻の実家のにしん漬
小松原眼下に凧の脚線美
左義長の燻りぞめは紙の音
左義長の達磨を嘗める大ほむら
釣人もその方見遣る大とんど
めでたくて蜜柑に種子のあることも
松過ぎの少し熱めの湯の加減
目白らにせめて庭木の遣る家
質素なり山茱萸ほぐるゝまでの景
鴟去んで仕舞ひし窓の殺風景
すべすべと寒波に枝張る若き桃
コンソメスープ舌に冴え冴え胡椒味
雀入れ冬木の切り絵景色かな
山茱萸の粗悪な土地に粗末な枝
骨ばって垣のあぢさゐひっ乾ぶ
とんがって風切る冬木の芽の容
ろう梅のはなくたくたとなつてをり
混沌を愉しむが如梅ヶ枝
寒紅梅介護享けゐる婆の家
寒紅梅見とがめし足宙にあり
少子化の世とうらはらに木瓜の数
朝顔の種子まだ垣に横着者
山茱萸の霞み始むにもう一刻
枯山茱萸かさかさしをる手をこする
暮れてなほ母艦遊びや青木の実
餅花に振り返る眼を元に戻す

手の空く妻今初刷をまとめ読み
へし折ってみたくなるもの氷柱の意地
山菜萁の出を待つまでの殺風景
凧脚美しく使ひけり
胸中に展ける餅の黴の花
聴いてをり長男家族の初詣
青文旦ときに系譜を重んぜず
咲く前のミモザにこゑを為さざるこゑ
横丁の雀のはしやぐ大旦
床擦れに手を遣り寝床に迎ふ年
冷え症の妻厚着してウオーキング
喜んで孫に振り回さるる年
ひつ乾ぶ柘榴うち過ぎ冥（よみ）の道
松過ぎの散髪老人ばかりにて
手の混んだ菓子袋いや一葉忌
屑籠の粗き網目に日脚伸ぶ
換気して七日の風に生きづきぬ
松過ぎの雲高空の風運ぶ
晩生なる蜜柑に当たり外れなし
丸め寝る身体羽毛布団でなし
手に息かけ寒風に揉まれくる
マスクの目眠気催し始めけり
マスクの目いちいち顔をりにけり
寒晴れの薄月上がりみたる方
丸まって椿の蕾寒風裡
石塀の枯蔦横に横に這ふ
昼月の薄月松のとれし空
一步出てかんばせ怯む寒日和
賀状こもごも眼鏡外してよく見ゆ距離
老人を手玉にとりて縞梟
三度目になるか寒夜の尿絞る
突貫工事トテカン師走のそら震ふ
初夢に俳諧名伯楽の与太
換気して七日の風を入れ過ぎぬ
雲は眉三日のそらの目鼻立
鳥影の一瞬障子瞬ける
日暮鴟影絵世界のいよいよや
老人が餅につかへしとぞニュース
その裡に読むものの山十二月

妻

日の出見るウォーキングにして防寒着
成人式番の目白見かける日
相方の句友おもふや熱爛に

留守番の時々目遣る鏡餅

鏡餅おろせし部屋に飾り炭

寒風に手が千切れさう自転車漕ぐ

嚏して湯ぼてり菩薩の顔ハチャメチャ

豚汁の豚（とん）を浚へる煮立汁

ほつぺたが落つこちさうな栃オトメ

死に恥を懼れてゐては直る蟬

泥むこととことん嫌ふ田螺にて

茶化されて茶化してゑのころ草同士

車窓過ぐ燕のツートンカラーかな

出初式男がすたるといふ言葉
太鼓橋そこを渡れば牡丹園
風邪ぎみの咳青天に響かする
花季の陽気よ寒さ一変して
路地裏に訝す咳に聞き覚え
股引干す陽気は三月下旬並み
鼻の啼かなくなりし闇ゲバゲバ
初場所のふところ深き貴ノ浪
玉力道投げに切れ味ありにけり
栃乃洋どうしたとか白星なし
氷点下鉢の金魚が気になりて
覗かれて目と目が遭ひぬ凍み金魚
越年の金魚数えて五匹ほど
横綱の中広の顔正月場所
横綱の餅肌たぶと控えに入る

冬ぼたん隣る古木は春ぼたん
人ごゑの絶えししじまに冬ぼたん
手焙りを俳諧仲間取り囲み
冬ぼたん二輪二輪にして具然
冬ぼたん寄り添ひ咲きといふ風情
小輪のはた中輪の寒ぼたん
顎引いて冬のぼたんを撮る構え
大方は日陰に入りぬ冬ぼたん
冬ぼたん盛る隣に春ぼたん
じぐざくに真冬の園の牡丹見て
春灯し鎌倉駅の時計塔
菰被り冬のぼたんよこんにちわ

八幡宮破魔矢握りて五十段
大銀杏左手（ゆんで）に登る初詣
水鳥にひしひし頬の締まる夕
ふらり入る四温の自然石の店
トンカツ屋油を金んに春灯
寒満月破魔矢携え戻る道
鎌倉の梅見処に早速来

変哲なき空の続きに柿の蒂
去年は去年今年は今柿の蒂
校庭にぼつんと冬木の桜の芽
八幡宮参道沿ひの樟淑気
桃なんぞ咲いて陽気もいい加減
水温む泡一つ消え一つ生れ
沼底より泡のぷっくり水温む
梅膨らまむ春先の陽気とよ
冬牡丹園の厠の朝顔よ
鳥ごゑに渦を緩めつ冬ぼたん
白無垢の呱呱とこゑ挙げ冬ぼたん
黒土に夕冷え及ぶ冬ぼたん
冬ぼたん背にし話の弾みをり
湯気立てて釜あり冬の牡丹園
紅梅の精境内を漂ふて
ぬばたまの黒翼翔つ冬菜畑
梅梅と巡る鎌倉梅未だし
ろう梅や夕日大きく傾きて
ぽんぽんと巨き飛石梅早し
陽気一変逡巡の梅ならむ
きのふ寒くけふあたたかく軒の梅
飛び石の高さを足して梅見客
鴨の嘴ぶるつと飛ばす水飛沫
山中に孤り長けゐる青木の実
枯蔓に小さき落木宙ぶらりん
裏白も耳を傾け冬清水
冬の川朽ち木の木橋補強して
見覚えのありて朽ち葉は烏瓜
冬清水鳴るに一刻日当りて
この木の芽何處か似てゐて猫柳
枯尾花日々日を浴みて軽くなる
日に酔へる枯尾花にも痴呆症
寒風に晒されどうし桃の枝
月半ば花入れ替はる花舗店頭
道草して通りすがりの桜草
桜草入荷大寒前にして
おやと寄り入荷したての桜草
枯蔓の藪ざうざうと日陰山
鶴鴿とただちに判る翔び方よ

太陽はまあるく売地の春草に
翻す鴨の脚うら水ぬるむ
枯木に鳥障子ぴしやりと閉せる家
紅梅の一輪人の絶えて莫し
引き算の美学うるはし正月花
曇り空春は何處かで足踏みして
一息に春来ぬまわりくどさかな
試験日の関東地方おおむね晴れ
豆炭で温め干支の飴細工
買初にアンパンマンの飴細工
注文の羊仕上がる飴細工
あん肝の混沌を売る鮮魚店
小柴産地鰯の干物血筋透く
離れ寄りためつすがめつ冬ぼたん
冬ぼたん鳥の羽音を聴くばかり
冬ぼたん取り込み辺り夕暮れぬ
松過ぎの厠に聞ける夜の雨
冬来るとこむらがへりになつかれて
寒の床こむらがへりに大あわて
一遍像寒暮を歩き出すところ
目白翔ち目にも止まらぬ一を引く
上海蟹がんじがらめに中華街
大寒の湯気まうまうと立てる湯に
大寒の湯気籠るべしバスルーム
鵜の実を引立て目白の目もとあり
堂の屋根そこぬくければ杜の鳩
平板に過ぐ来し方や来る年も
わが好みのストックは白野島崎
夕暮に漂ひ出せる冬ぼたん
玻璃二月視界をよぎるものを待つ
露地咲きのあらせいとうに濤駆ける
暮色今こよなき白の冬ぼたん
そこもとに足止め奇しき冬ぼたん
鴨蹴って水裏返る春なりし
籠もる身の枯あぢさゐに等しきか
臘梅を見上ぐる浄智寺御門前
はつはるの空を舞はれよ宮の鳩
軒先の氷柱に飽きて温泉場
あらせいとう眠らせ濤の子守唄

初湯してうすぼんやりとおもふこと
国際俳句ブーム

五里霧中俳諧国のお膝元

冬ぼたんわれ瞬けば瞬くか

青芭蕉先づぶっ割きて風颯風

梅探り北鎌倉の風探り

今年はと力んで始まる俳諧ごと

三浦さん

賀状の主親子二代のおつきあい

あぢさゐの他の枯れざま見渡せり

霜柱道の溶け出し往生す

藤の種子爪にカチカチ当ててをり

枯あぢさゐばかりの景の退屈や

大寒にこんな日もありもうけもの

大寒の名に恥づ日和でありにけり

草芽吹く小庭に母の出ずっぱり

段取りをさらってをりぬ冬日向

海髪干してこれから造る化粧水

はくれむ咲く彼の家もちろん承知ノ助

春は島の弁天詣にエスカレーター

しづり雪煙を上げて捨湯川

春の色帯びてや棚の枝さんご

春めく庭おん母出たり引つ込んだり

春めきて鳩を追ひ掛く稚児の脚

軒氷柱意志を通して阿らず

初飛脚通路も埋まる映画館

拾ひ来て海髪より造る美顔水

石蓴搔きだぶつき気味のゴム胴着

宮鳩の首の伸縮春隣

建材屋春めく脚立目白押し

手を揉んで大寒の日と諾へり

大寒のこむらがへりに備えねば

沈黙の臓器に佳けれ寒蜩

大寒の日のぼか陽気肩すかし

大寒の片頬ぬくし日の在り処

度忘れのぼつぼつ始まるおらが春

初座敷写真写りの悪き吾

初詣厄祓告ぐ太鼓どん

牡丹園手焙りの灰堆く

木の葉髪六ツ差し出し祓はるる
校正の合間合間の暖房音
正月のもう散らかせる居間跨ぎ
コインテレビきかれて湯宿の窓の雪

永き日の人目はばかる喫煙所
一病を忘れて日永の愛煙家
木の葉髪うとうとし出す理髪椅子

冬ぼたん化仏のごとく在すなり
その前に独りだんまり冬ぼたん
冬ぼたん訪ふ風もなく昏れつ
冬ぼたんうち籠らへる藁の御簾
有り体のまゝに昏れたる冬ぼたん
冬ぼたん近寄る人の影感ず
冬ぼたん真正面より見て無口
然れば夕凍み牡丹の園をわたるなり
めくばせの其処に在りけり冬ぼたん
冬ぼたん漂ふ空の底明り
怖る怖る蕾を解ける冬ぼたん
夕づけば翳濃くしたり冬ぼたん
冬ぼたん落花堆（つ）みたり土の黒
冬ぼたん藁の襲をうち被き

野草観察みんなほほうとシモバシラ
冬ぼたん苑を囲ふに水籬
大寒の風が鳴らして波韻く
一刷けに成れる青天寒ぼたん
玻璃越しに見ゆ大寒の雲と風
桜草植えをり妻の名は陽子
鮎やくつくつくつと鍋シーズン
初相撲こらふ俵の剣が峰
冬鷗離りゆく目のうら悲し
冬ぼたん開花うながす薄日差
臘梅の花香どちらと云ひ難く
受験期の東京に出る冬の雨
手袋の要る日要らぬ日けふ要る日
股引のもう手放せぬ太郎月
相撲観戦感冒猛威振ふ中
松とれて今年初回の心電図
マスクせむ巷ウィルスの繁殖期
採血や寒九の腕折り曲げて
蓑虫の蓑剥ぐおもひ医師の前
手袋探すポケットの中おぼつか
ポケットがあり過ぎ困る防寒服
探しもの小春のポケット再点検

破魔矢持ち傘持ち何か忘れさう
さえざえと魚拓の鱗釣具店

着膨れて隣席侵す根岸線

鈴懸の実の黒寒雨滴れり

あらぬこと口走りては寒風に

切符探るあらぬ眼をして木の葉髪

寒中の自分の形もつ相撲

露天風呂やみくもに降る雪の底

貧すれば鈍する漁や花アロエ

花アロエ過疎斯くまでにすすむ村

いもぼうの古地（ふるじ）の如き齡賜へ

あれこれと今年の風邪の諸症状

命名の話ほのぼの寒紅梅

京の名のつく菜・人参お茶漬す

厄落しこんなにあるよ初神籤

意外なるつめたさもてる鶯餅

鶯餅粉のついたる指の腹

つまみては口に放てる鶯餅

旨きかな遠くに目遣る鶯餅

鶯餅つまみし感触まだ指に

鶯餅あの感触を恋へる指

奴風転落砂の音するよ

砂優しければ揚風砂に墜つ

てのひらを返す如くに寒戻り

江ノ電は人の目線の高さに梅

京の水京の底冷えすぎき漬

春の鳩大楠の木を回り込み

些事殖やし行かず仕舞いの初天神

折角の鎌倉山の梅咲かず

あつあつの油ぷりぷり寒諸子

そっけなく枯山茶萸を離るゝ日

枯蔦の日がな日当る精しさよ

枯蔦や石塀の角廻り込み

枯蔦のここが末端薄き日に

一月の玻璃の向ふに禽を見ず
北風の夜のオニオンスープに脂泛く
一月逝く身を解きほぐす湯舟のうへ
金柑の笑顔そこらに振りまきて
何時入りし切絵の世界梅の影
万年青の実愛づ吾も百代の過客にして
古俳諧ほどの目出度さ万年青の実
一月盡湯舟に瘦軀透かせ見て
一月の孤りごろの雲ぞ能き
金柑を生らせ死ぬまで棲む家ぞ
冬樺天を二分の壮気かな
年寄りには平屋を好む枯十賊
このところ袋蜘蛛など見ぬ起伏し
云はるゝまで親無子など見もせざる
山茱萸にいま一照りの夕日かな
戻れば肅然として冬けやき
初三十日昏れ初めて禽慌ただし
李の枝赤く細かく二月ぞら
花咲かぬ君子蘭置く縁日向
冬芽持つくわりんの木肌てらてらと
木の表情わけても二月の李の枝
寒暖の内外内に籠るなり
餌漁る目白に鶉の加はらず
一月も末なる或る日の雲の量
妻戻り来て云ふ何處そこの霜柱
小さき雲たまさか通る一月盡
締め直す蛇口の緩み一月盡
晦日正月コンビンで買ふ団子など
厠花赤きを通す初三十日
完熟の蜜柑手にせる初三十日
一つ木に枯葉二夕ひら一月盡
松とれて太田胃散もなべて暇
空の端に雲聚りて一月盡
冬とんび真下の海の澄みをらむ
冬雲の明るさに照り勝る梢
越年の小壇に赤き厠花
裸木のこよなき艶がすべてなり
佛頭を見にをばさんのマスク族
冬雲の聚り易き空の端

一月の梢見てあるく職安まで
白雲を片寄らす風一月盡

梢照るなり一月の空の奥

底晴れの空鳴るばかり一月盡

まつさをに研ぎ澄まさるる穹一月

突っかかり来る寒風に身構えて

寒風を切り裂きゆける鼻柱

この辺がいつも傷みて古扇子

ががんぼの深窓につと立ち寄れる

ががんぼの静止してやや前屈み

ががんぼの揺れおさまりて本の上

泥棒市のモンキーバナナ忘れめや

天の川いつか爆ぜ火のかるめ焼

春節のめでたさ還る商の御代
春節の街並み抜けて地久門
春節や人波の上の朝陽門
日まみれに春節迎ふ善隣門
対聯の赫染み飯店出づる顔
街並みは目の覚める赫春節来
春聯（チェンリエン）に春日注げる中華店
春節やドラの巨濤に吞まる路地
春節の飯店気前よき盛り付け
焼栗の香の濛々と中山路
春節の関羽煙たげ支那線香
春節の支那線香を高掲げ
支那線香春は大地の黄土いろ
春節のとりわけ赫き豚肉（チャーシュー）食ぶ
卓上に春節のいろ上海蟹
春節の円卓ぐるりぐるりかな
春節の羅漢果三つ家苞に
春節の夕べひっそり漢方店
正月来横濱華僑總會所
中華鍋露天に積みて初商
春節の赤幡連ね中山路
春節セール松の実南瓜の種諸々
豚饅頭（ぶたまん）を山積み春節セールとて
春節の布袋呼び込む點心舗
飯店の春聯ほのぼの客迎ふ
列なして春節の豚角煮店
魚団子スープの湯気に春節来
チャイニーズシューズ金ぴか春節祭
対蹄（トウイリエン）の金文字飯店繁盛す
唐子頭大市場通りの晩白柚
チャイナタウン八百屋に買い初めランブータン
沖縄産スターフルーツ召し上げれ
春節の飯店「福」の逆さ文字
中華菓子めでたき名あり初商
大釜に甘栗焼ける広東道

點心舗の主の云へる

正月用年々（ニエンカウ）の味さしずめは・・・
脇路地で豚饅頭商ふ旧正月

裸木のおどけ鈴懸並木かな

春節や春在千門万戸中

清の詩人の葉燮に『迎春』と題したすぐれた詩がある。

律転鴻鈞佳気同 律は転じ鴻鈞として佳気を同にし

肩摩鞞撃楽融々 肩を摩し鞞を撃し楽融々たり

不須迎向東郊去 東郊に去きて迎えることなし

春在千門万戸中 春は千門万戸の中に在り

（大意——公正太平の盛年は喜びに満ち、行人、車両は和気あいあいと道にあふれている。東郊に行つて迎えることはないよ、春はすでに家々の中に満ちているから）

年祝げる獅子の瞬きばさばさと

春節料理先づは甕出し紹興酒

蒸し餅をけふ春節と聞くからに

チャイナタウン栗焼くはたを通りけり

老酒を春節の胃に点じけり

春節の中華街観るあらためて

飯店に「福」の逆さ字春節来

詣で事どつちつかずの初老とも

立春と云ひつ外に出て首すくめ

立春の八百万神覚ます風

立春の焰躍れり釜の下

立春の煙草の灰のやはらかに

転がらむばかりの露玉上り路

立春の今日とて寝床飛び出しぬ

尋ぬなら何處そこの梅囲み記事

ふきのたう一つ扱て春生まれしや

立春の一語を以て押し切られ

立春の筆立にある赤えんぴつ

春立つと外の出で一味違ふ呼気
立春の雑木大地に光り佇つ
埋草にお手玉のこと懐かしく
佐保姫が雑木揺るがせ裏の山
大寒や直ぐに目のゆく物故者欄
大寒に届きし荷縄の固結び
桜草花舗はひっそり戸を閉ざし
桜草に何か言ひたげ佇むひと
待春の坂攀じて坂下りる用
春は未だ未だぞと仁王睨みづめ
風紋の拡がるばかり浮寝鳥
とつつきの梅の蒼のくりくりと
山窪の水震はせて芹生ふか
禽ごゑの一つそれきり冬清水
山風の吹いて震はす芹の水
柴犬の疾走春の土の音
芹摘みの未だ現はれぬ風の中
芹の水絶えず震はせ何か居る
着膨れ引く犬も中年肥りかな
寺町の梅の遅速を見て歩かむ
裸木の今は日を欲る許りの枝
鳥を見て犬の嗅覚冴ゆる朝
からす瓜蔓の無惨を晒しをり
みそさざい藪深ければひそみ鳴き
林間のオオイヌフグリ薄日欲る
林間に落葉の降りて山肥やす
山に頭つ音を吸ひたる寒椿
犬連れて着膨れ散歩者つける息
蹠の斯く忙しや春立ちちて
蹠の幾たび搔けば水温む
枯れ銀杏羅漢の如く彳ちゐたり
枯蔦の系図を横に拡げけり
莫迦成りの数はともかく柿の蒂
蔦這はす家のひっそり日陰中
枇杷の此の花やら実やらややしや

瀬戸神社

椰の葉の心底あをき節分会
海見ゆる社殿に節分追儼式

掛け声も小じんまりして節分会
小びっこの豆撒きてんでんばらばらに
前列の子供の享ける追儼豆
鬼の豆たまさか来ればすかさず手

浅草の平日晴れの節分会

白黒の街頭テレビの世の節分

古文書にそもそも鬼豆打ノ事

年賀メール視力事欠くパソコンに

賜来たか直ちに見遣る窓の外

探梅や飴口中に転がして

紅梅の紅白梅に先んじて

くすみゐる木（ボク）の先っぽ牡丹の芽

二つ目の雪達磨あり作りかけ

年立てる雑誌に俳句の稽古事

股引を履いてゆけとよことごとし

大寒の煙草の灰のガクと落ち

紅梅の懐に入る目暗がり

紅梅の戻りて黒に近き紅

昏昏と鼻ねむり雪の景

ぬばたまのねずみもちの実艶ならず

初日影お日柄といふ言葉あり

黒板にチョーク走らす音初夢

宮守に助っ人現れて落葉掃く

猥雑な榊の花の雨まみれ

金沢八景 乙 鱸海岸

ぼんくら馬刀掘り返されてしまひけり
渚また石蓐の森に入るごとし
磯に沿ひ歩けば石蓐に眩きごと
鴉と我日永の渚にとり遺され
洗はるゝ浅蜷真水に頭てる縞
渚臭しあをさの風を運び来る
スコップに馬刀貝の子も掘り出され
渚吹く風にあをさの染み付けり
海苔拾ふお国談義の婆と婆
掬ひ上げ光り滴るもの海雲
海苔採る今を昔に流れ海苔
海苔拾ふうすもいろの掌に
馬刀に次ぎ何を掘り出す沙蚕（ごかい）掘
干潟にやたら穴ぼこ空けてゴカイ掘
青海苔の乾からび白光放つ巖
永日のイソメ掘り立て驚かす
摩訶不思議な紐を聚めるゴカイ掘
春のと或る日飛んだ目に遭ふ岩イソメ
永日の袋イソメに逃げられし
ジャリメ・ゴカイ日永の馬穴の底を這ふ
漁られ馬穴にイソメ泳ぎをり
早春のバケジャコを出すゴカイ掘
海苔拾ひはた浅蜷掘二兎を追ふ
ここいらと見当つけて浅蜷掘り
ぬばたまの黒磯鴉石蓐の中
投げ出せる蛻の袋イソメかな
海苔拾ふ海苔の如くに漂ふて
粗朶離る海苔掬ふこと百万遍
返されし磯の海月に昼の月
早春の海月渚にもう一つ
早春の海月あをさを褥とす
磯あをさ波の形に波打って
浅蜷に実の入る頃ほひぞ百重波
中腰のあ痛たた流れ海苔拾ふ
海髪採ってくるのは美顔水のため

ゴカイ掘自慢のイソメ披露せり
蹠音に敏き干潟のゴカイ掘
腰伸ばし海苔の塵取りまだ半ば
ゴカイ掘話転じて釣談義

青海苔を採る永日の日を忘れ
早春の海月小ぶりよ波の間に
海苔拾ふ女ばかりの中に入り
少年の昔の波音流れ海苔

足ゆびに力の入る浅蜷掘
快々と砂を掻くなり浅蜷掘り
浅蜷掘などして腰を傷めけり
浅蜷でも掘ろうか海へ足が向く
紅き海草春の慶び告ぐるごと
砂浜の砂窪日永の日を溜めて
ひとり来て冬の石蓴の海っぺた
海苔育つ海はひろいな大きいな

折り鶴にひとり遊びの日永妻
日表に顔差し出すや春は来ぬ

眼に入る限りの春星仰ぎ見て
春星の間合を一つ一つ見て
おやと目に止まる春星うひうひし
潮の香に交りたしかに丁字の香
真っ先に丁字に気付く顔したり
寺町の辻曲るとき丁字の香

この径は町内の裡沈丁花
沈丁のかほりに後振り返り
この家は昔からある沈丁花

大冬木昏れ黒凍みの鳥点ず
こんがらかる枯木の中や八幡さま
枯木混む犇めく枝は相恃み
枯蔦が這ひ吸盤に類すもの
日が伸びしとは云へ曇りづめの町
桜草鉢植にして家具売場
ひんぴんと春の賜くる杜の樟
節分草目当てのバスのツアーあり
桜草風のぶつかる花舗の玻璃

岡村梅園

久良岐郡蒔田村辺の梅の花
ちよと戻り覗きし店に雛あられ
鈴懸の実の成る神社日の永し
白梅の満開となる真昼間
紅梅の樹下に黒猫ぬつと現れ
烏山椒枯らし未だ鋭き山の風
春の鴟疎林に姿現はして
梅林の厠の壁の白かつし
梅林をいつしか抜けをり日向道
谷戸の上に出でて紅梅目に納む
山間の魁の梅探らむと

岡村天神

針塚の文字白抜きにむめの花
淡泊な天満宮の紅き梅
紅梅を少し多めに天満宮
菅公の梅石畳直進す
稲荷の赤天神さまの梅の赤
天神の梅の合間の忠魂碑
天神の鳥居二つ目くぐれば梅
紅梅の小木も交れる天満宮
天神の早梅真白き花混むよ
梅みむと天神前でバスを降り
紅梅に佇めば土ふかふかと
どうせなら人出ぬ前の谷戸の梅
早過ぎることは承知の上の梅
紅梅に差し込む日筋斜めなり
春を待つ木五倍子焦げ茶にくすみ垂れ
紅梅を躪たせる日差し加減かな
そらそこの紅らむ枝に春の鴟

春来るとひよこ色なるユニフォーム

休日の学校に来る春の鴟

日が永くなりあぢさゐの芽の臙脂

坂は下る一方日永の影を踏み

日が永くなりし梢に古巢あり

春其処に枯蔦力抜き玉へ

三殿台遺跡

若草のいついつ萌ゆる考古館
水仙花古墳の丘に香を放つ
喫水の胃の腑にひやひや水仙花
遺溝吹く風の続きに犬ふぐり
枯芝に復元住居三つ立つ

妙法寺

江戸に名を取りし杉田の梅の裔
一世を風靡せし梅唐の世も
懐風藻梅のかほりを漂はせ
花は梅随・唐の世を偲ぶべく

水溜り何かや映す春は来ぬ
春浅くもの映しそむにはたづみ
日もめつきり春めき並木の木偶ノ坊
風呂敷を抱ふ出で立ち春は来ぬ
駐輪場光満杯春近し

春めくもの妻に指さしバス車窓
プラタナス日永雀の枝移り
永日のブルーベリーの菓子匂ふ
ゲソありてこそこのやはらか煮大根
逃げ水につきしたがへる磯鴉
宗達の扇絵鳴神置く構図

木瓜の花もつてまはらぬ俳句好し
手袋のうすむらさきが拾はれず
チューリップ植えた通りに芽を出せり
不細工よ牡丹の木（ボク）の枯れざまは
春日中寄り来る鳩の遠慮がち
木蓮の枝はつらつと冬日差
駆くる鳩めつきり春となりにけり
毛衣を脱いで喜多方ラーメン亭
ラーメンの焼豚ぷると抓めば春
腰使ふ浅蜷掘とは知らざりき
地に降りて翔ちてきりなし寒雀
袖の雲脂指で弾きて春遠し
氷見て戻る他には用はなし
都心にゆく気を打ひしぐ余寒なる
歩道橋踊場に見る冬落暉
沈丁や通り慣れたる道端に
伊予柑に終の蜜柑の座を譲る
手袋を拾ふて途方にくれる方
手袋の片方拾ふてみたもの
せきれいの翔び歩き又翔び歩き
首すぼめ出づる余寒の理髪店
曇天の厚み封ずる鴟鋭声
鴟啼いて曇天低う低うせり
もくれんの毳立つ冬芽こんなにも
白木蓮開花するにはあと幾日
ポケットの中に拳や余寒なほ
一隅の桃と李の固め植え
山茱萸の無頼を通し来て浅春
クロツカス一輪春めく日も一輪
夜昼をかほりて倦まず沈丁花
又の日を待む余寒にかこつけて
寒椿落ちねば心に落としみぬ
一日は永きもの哉蠅生まる
石を替ゆ蠅と退屈同士かな
白梅は語らず其処で一思案
搔き回すことが好きなる蠅生まる
一つづゝおろそかならず梅の紅

横須賀の山に春来とやつて来ぬ
山茱萸の日暮れ惜しまむ片田舎
古墳の丘まだ萌え出づる草もなし
手当たり次第はおりて二月始まれり
白梅の氣力頼さす風の中
何處となくとんがる風や梅林に
首ひよいと擡げるふきのたう未だよ
けふよりは膨らみをらむあすの梅
白梅の翁日を浴ぶ満面に
犬ふぐり川はなめらか音立てず
紅梅の内懐は暗かりき
ひともとの紅梅裏む薄日差し
川吹いて春さきがけの風荒き
木五倍子の芽見たくて登り来ゆゑしらず
日の陰る梅組み立てしごとき枝
二ヶ月も半ばと云ひて手をこする
乾っからぶ土に二月の影曳く楠
猫柳少し膨らみ事もなし
紅梅のほんとの紅は蕾のうち
実時墓所つらつら椿ある限り
椿一輪五輪拾ひてあと止めぬ
心情は今も氷柱のごとき人
観梅の逸るころを先立てゝ
柿の蒂無造作も斯く極まれば
紅梅を遠くしてみる一風情
一切を封ず氷の初一念
不粹なる山を彩どる梅椿
犬ふぐり見るとて草に正座して
変哲の無き景ばかり梅二月
掌の中に笑まふ椿の一菩薩
冬日輪古佛の笑まふ如くなり
少年の昔を今に海苔採る景
どちらかと云へば紅梅勝る景
山茱萸の花が創りし陽気なり
白描の二月の枝を鋭く引く
甲羅干す亀にかまけて日を伸ばす
掃くことを誰もためらふ落椿
蠅の云ふ眉唾ものの氏素性
張り初めし氷のことを妻教ゆ

剪定の音の小さくはつきりと
剪定す音の聞ゆる今日この頃
樹々にこゑ懸けて廻れる春そこに
着膨れたやうな俳句の道具立
犬ふぐり一人歩きを彼の人も
ひとごとの最たる日なりバレンタイン
間食に妻の差し入れバレンタイン
甘党の吾にもバレンタインの日
きさらぎのホ句は小景小品に
顔付きの哲学者ぶり隼人瓜
土湿る山に早梅探らむと
山茶花は霜傷みしてはや醜女
枝沿ひに桃咲き昇る青天井
ご昵懇なる紅梅に遭ひに行く
紅梅に抱え込まれる如くぬ
内弁慶御免被る豆打役
老人には和菓子バレンタインの日
和菓子屋に入れりはたして雛あられ
梅林を一巡りして退場す
魁の梅前にしてホ句ごころ
我が知れる梅林の数指折りて
鎌倉の咲く迄待とう谷戸の梅
咲く気無き梅の廻りを一巡り
探梅におととし尋ねゆきし寺
春に似て妻の懐広きかな
杜撰はた整然梅の徒長枝は
同じ道黙し戻れば冴え返る
鳥見居り小じんまりした梅林に
蓑虫のごとく籠れり旅の虫
「もっと陽を」芽木に代はりて進言す
日曜のニュース聞きをり蒲団の裡
うんすんも云はぬ堅物坊の梅
もう待てぬ梅の性分一分咲き
何もせねば木石の類枯日向
指栗車窓に桃の咲くを見て
留守居して紙屑籠と長閑な時
とぐる巻く青ゴムホース春近し
三春の魁為してまんさく咲く
三春のここに始まる濤の音

三春のことぶれまだか坊主山
目に入る花卉乏しくて犬ふぐり
これと云ひ見るもの無くて藪椿
金縷梅の黄色は中華菓子のいろ
金縷梅が震えて申す「日が弱き」
乾からびしはこべが庭の石の上
蛇口から水迸る光の春

佐野美智さん

春寒に転倒せしかお大事に
運河べり枯木を映すばかりなり
待春の介護バス来て婆拾ふ
介護バス来るを婆待つ春なれや
しまい込む箆筒預金や梅の日々
もうそろそろ春が来るかと遠めがね
海苔採に昔語りを浦浪は

梅咲きて虎屋の羊羹旨き昼

枯蔦の込み入る意図を詮索す
春告げに来る風今か今かとも
来る筈の春が何處かで道草す
又曇天春が来るとも思はれず
剪りて梅活け込んで梅その英気
回り込み見る紅梅の媪ぶり

日向ぼこ麻酔のごとく睡魔来ぬ
見てくれは懺悔する態日向ぼこ
二時間が限度の仕事日脚伸ば
木の葉髪初老のゆゑか根ン無くす
蔵壁は永久の真白さ梅の花

日永の家蛇口をひねる音がして
梅林の上の日向の避寒宿

三冬を黙して椰の哲学者
日が永くなりて介護車よく見かけ
文旦は親分柚子はその子分
烈風もものかは梅の狭気かな

日比谷公園

鶴其処に立つごと二月の噴水は
診察に何時まで通ふ沈丁花
公園の枯芝眩し昼休み
公園に新聞広げ日永人

鳩を見て憩ふ視線も春めけり
鈴懸の実のたくさんなこと日比谷街
噴水の一人舞台や枯苑に
噴水の羽ばたくと見え枯木越し

皇居前

芽吹き初む柳を見むと桜田濠
盲人の日永の杖を突く外苑
柳ふく濠端に出づサブウエイ
日が伸びてこころ和む日皇居まで
二重橋折しも春の雲が来て

草青む皇居広場の西東

皇居前東西南北日永人

皇居前手を振り歩く日永人

皇居へと玉砂利鳴らし日永人

皇居前車の路と人の路

芽柳の皇居に懸かる橋幾つ

芽柳越し絵になるやうな二重橋

永日の人の聚る二重橋

皇居に来鶯どきのガイド嬢

鳩バスの一団ようこそ柳の芽

サクサクと玉砂利踏むも長閑なり

二重橋交番脇の柳の芽

玉砂利の皇居前歩す日永人

二重橋朋とし日永の警察官

日永欲る人の歩める皇居前

皇居広場丸みを帯びて砂利長閑か

永き日の日に恵まれて皇居前

柳の芽お濠に面すホテル群

梅屋敷 梅林

ひともとの梅の根方に狂歌の碑

魁の梅に近づく写楽顔

狂歌堂真顔の歌碑に梅の風

葉商の手になる梅の梅屋敷

紅梅へのつと漢の頤かな

観梅に佇むひとと数える程

甲矢（はや）乙矢（おとや）飄と空切る梅二月

白梅に甲矢（はや）の弓づる離るゝ音
佇みて坐りて観梅百姿態

観梅も明治天皇お成りの地
お決まり梅の句碑あり梅屋敷

秋興に深入りするをもう止めよ
翌檜は理想家夏雲湧く尾根に

属目

裏側のここに椿の傷手かな
紙風船けふは曇りてさむき色
紙風船春を手玉にとるごとく
春の鴝こんな日もあるこんな日も
むくつけき男の子の家の雛祭
枯山菜萸紆余曲折のなれの果
山菜萸の希望見いだすごと咲ける
手につつむ茶碗の温み春隣
二ヶ月の噴水立てる鶴の臍
桃・李首長くして待つ節句
桃は桃で李は李で留守居顔
伊予柑を凹ます力聚めけり
のどけさは五家宝噛みしあとの兒
五家宝を朋とし日永の留守居役
伊予柑の色艶眺め廻し剥く
庭仕事如雨露持ち出す春となり
ものの芽に如雨露光りの雨降らす
如雨露もて花に水遣る春なれや
小庭にも春くる證し山菜萸咲く
日向ぼこし過ぎて頭くるくるばあ
春の蠅庭石はまだ冷たかる
春の蠅飛石の上に暖をとる
三寒と四温のぎったんばったんこ
このやうな三寒は嫌（いや）四温待つ
チューリップ降り注ぐ日を溜むる花器
桜餅つまむ指先こんな感じ
もの音を推量する耳桜餅
種袋種吐き出してぺったんこ
泛く泡は沼のあくびや日脚伸ぶ
雛あられ彩に過不足なかりけり
もう一彩むらさき欲しき雛あられ
春訪ふ兆しは曰く言い難し
紫荊曇れば野望の彩深め
焼鳥の串まで焦げて酔迅し
デザートに年々大き苺かな
人並みの確定申告柳の芽

雪達磨の一団天気凶覆ふ朝
この気配昼から雪をもたらす空
朝方の空を見回す春隣
朝入れるポットに麦湯春隣
ひとり酌む甘酢の海苔に宵の雨
桃・万作花期を違へて賑はふ庭
居間に盈つ灯しとこゑと伊予柑と
伊予柑剥く皮は分厚き感触に
先づ以て伊予柑のこのデコボコ感
雛祭浅蜷は管を足にして
何よりや大島桜の開花報
都内にしてもう咲く大島桜かな
ものの芽の魁為すはどれが先
無防備な頭上を翔けて春の鴟
庭隅に年々小ぶりつぼすみれ
まんさくにか細き風の過ぐるのみ
鉛筆をまとめて削る春隣
鉛筆立聳てる机上の冬景色
山茱萸の烟るかに縁薄れたり
山茱萸も人の縁も遙かなり
疎遠にして懐かしきひと枇杷の花
犬ふぐり殊勝といふに余りある
忘るゝを思い出させる沈丁花
皆忘れて仕舞ふ安らぎ枇杷の花
ふだん着の桃先達の佳き教え
先達の魚氷に上る句を鏡
物芽出づ雨が優しくなりにけり
ものの芽に丸み帯ぶもの尖るもの
ものの芽に少し冷たき雨ありぬ
永き日の寺に石工の手弁当
生きもののごとくに春の雨水輪
金澤文庫
堂裏に古草武州金澤山（きんたくさん）
犬陰囊（いぬふぐり）あらぬ文ン字をあてがはれ
居住まいは古巢に似たり荒るゝ儘
水輪生み継ぐ雨以て春意とす
づけづけとももの云ふひとや沈丁花
立春と復誦しては春立たす
又も聞く節分草は見たきもの

摘草の人のくつつき離れたり
三春の一の春今始まれり
山窪のここにも蝌蚪の見あたらず
はこべらの花へ目を遣る一目づゝ
ぶらんこの姉が妹に手本見す
海原に乗り出だすとふらここ漕ぐ
根気無きことを歎ける日永かな
白梅の盈つるは遅し裏の山
留守居せる様は田螺が襦袢着て
裏山や椿の上に椿落つ
尊びて心に置く人鳴雪忌
臘梅の蠟の溶け出す日和かな

武州 金澤八景 乙 鱸海岸

海苔採の翌日の腰頼りなき

遠浅の小貝のねむる春の海

浦晴れてしこたまあらかな流れ海苔

長閑なる理科の時間や砂鉄採

風呂敷のごとき海苔欲し流れ海苔

海苔好きな蠅とは小奴も贅沢な

長閑さは遠浅の海うちのべて

永き日の沖の波見て砂払ふ

浅蜷掘およその潮干見計らひ

小波にひとり頷き春立てり

貝殻付ゴカイの春の生身かな

ぽかと生れ干潟のひよっこりひょうたん島

股引を濡らして爺の浅蜷掘

遠浅の浅春の波立つところ

汐干狩あさりの如く口つぐみ

海底を彩どる藻草雛祭

海苔拾ひとてもたまらぬ冷たさに

流れ海苔鴉のごとく翔けるあり

海中に大きく見えて流れ海苔

流れ海苔拾へる人の身拵え

海苔採の腰が泳いで採り疲れ

浅蜷掘る手許に上げ潮来てゐたる

海苔叩く音のとんとこ日脚伸ぶ

出刃持って小柴の寒海苔百叩き

浅蜷掘あれつあれつと上げ潮す

上げ潮と気付きしよりの潮迅し
冬鷗生れし干潟を嘉しけり
長靴履海苔採姿出来上がり
海苔拾ひこれは一等海苔なるや
海苔採の籠相の袖口絞りけり
我が拾ふ海苔は三等海苔でよし

孫

何でも綴ず孫のホチキス音長閑
孫に来る桃の節句が吾にも来る
孫が来てそこらをいじり廻す春
紙風船ぐちゃぐちゃにして興ず孫
怪獣ごっこ紙風船にもう飽きて
孫の息足して膨らむ紙風船
きさらぎや孫を預かり雨籠り

嗅がされて閉口ものの灸花
山妻の我当てにせぬ煤払ひ

田浦梅林

これはえーと頭から乗る日永のバス
日永のバス後部座席はよく弾む
日永婆転がり込むなり市営バス
横須賀市田浦梅林ここで下車
地若布の入荷告ぐビラお茶屋さん
地若布売る昔ながらの鮮魚店
風の他訪ふものも無きハケの梅
のほほんと登りて降りて梅の山
早梅に風鳴る山の高みかな
整然たる梅林を振り返りたる
梅林を見て来て来て頬っぺ赤きひと
早梅の山順繰りにひと降ろす
樹皮齧るリスみて春まだ浅き山
雨吸ひし山の中腹遠紅梅
老梅に風鳴るばかり北斜面
雛壇のごとき棚田に梅を観る
梅林に流る人ごゑ風交り
よべ雨の端山紅梅彩尽くす
紅梅の樹下の黒土踏みしめぬ
紅梅やつるんと転けそな山の径
白梅の玲瓏に稍浸りをり
紅梅の懐に入る鳥のごと
紅梅を揺さぶる風の段島
紅梅の彩の厳しく急斜面
犬ふぐりひとっこひとり来ぬ山に
樹皮凜と二月半ばのさくらの幹
沖に起つきさらぎの波桜の樹皮
山はまださくらに早きさくらの幹
梅林の日溜りでとるお弁当
水仙に次々差し出すひとの鼻
たまに逢ふことが佳きこと梅三分
梅林の早咲き遅咲き梅に人
梅林の厠ぼつんと日溜りに
水仙の香を削ぎにくる汐っ風
梅林の花期を話題にして散策
梅林に突如湧きたる笑ごゑ

稀に鳥来て踏む春の畑の土
梅林出て襟搔き合はず夫婦もの
梅林の香の尽き赤土畑に出る
この枯木何の木榎と書いてある
急峻な坂の梅みる一呼吸
ひた登る山径峻し風と梅
梅林の烈風に手がちぎれさう
紅梅は隣の山に固め植え
袖煽る風ありてこそ観梅は
日向山梅の寡れのみえぬ裡
平日の梅林に日の透る見ゆ
急峻の登りに梅の固荅
問はれゐてちんぷんかんぷん枯木の名
藪蔭に笹鳴の音のひそまりて
鶯の啼くや母音を先立てゝ
昏るるまで高みの梅に日がな風
よべの雨山に余寒を残しけり
強情な野梅の枝と見て過ぎし
梅林の戻り何買おこんにやく屋
青果店桃の剪り花店先に
こんにやくのさしみふるふる雨水かな
剪定の枝荒くくりして段島
平日の梅林に人こんなにも
白梅を揺さぶりをりし風暮れし
目を移す斜面（なぞえ）の次の紅梅へ
登り口オオイヌフグリちりばめて
棒切れの先っぽに咲く梅の花
梅林の左半分端折りけり
紅梅の花の隙間の暗みかな
をばさんの会話梅林尽きるまで
紅梅を丹念にみる夫婦もの
濃き方の紅梅へ先づ足を向け
山の梅風は刃の登り径
頃合ひを見計らひ咲く梅律義
薄日差し根まで届きて犬ふぐり
華やげる前の木五倍子と知られけり
紅梅に見惚れる人の肩優し
梅林のちらほら咲きに遊びけり
梅林に吹き募る風尽きるなし

紅梅にほとりて一言あるべきか
をみならの眉のほとりの梅の花
風を過ぎ梅林を過ぎ頂へ
落椿の重ささうさうこんなもの
梅林に女の会話外れてゆく
早梅の芳香よどんではならぬ
寒ければ一直線に進むのみ
水溜り一瞥呉れて過ぐ余寒
梅の枝風に戦くばかりなり
白加賀に長居豊後に又長居
均等に日を配らるる犬ふぐり
寒風に背を丸めゆく人遠し
魁の梅好き者の一団か
好き者を聚めて赤き赤き梅
痩せ梅のおよその樹齡推し計る
ためらひがあつてはならず落椿
梅好む齡となりて佇めり
紅薄しともう一本の梅にゆく
ともかくも交通不便梅林は
揺るる度軀あづけて日永バス
紅梅を濃しとみる距離ありにけり
観梅におもむく一団前に行く
妻の位置吾の位置紅梅真ん中に
谷戸の梅揺さぶりづめに畑の風
緋紅梅揺さぶりづめに谷戸の風
山歩き淋しがらする木五倍子の芽
梅の葢びんと張りたる空気かな
犬ふぐり心許なき日影得て

乙 艦海岸

手応えの大き浅蜷の弁慶縞
浅蜷掘上げくる潮と首つぴき
これは又小さな浅蜷浅葱縞
浅蜷掘る大潮小潮小潮の日
浅蜷掘たうたう匳相致しけり
雛あさりぼちよんと波に擲てり
浅蜷居る證しそここ砂急くぼ
潮吹を邪慳に退けて錆シヤベル
浅蜷掘りし手がからからになりみたり

上げ潮の波がそこまで汐干狩
尻まるきこれは潮吹またもやか
昼の月潮吹かへりみられずよ
小用を一寸足しに浅蜷掘
浅蜷掘る後姿に日は斜め
干潟今あとかたもなし海の中
腰伸ばしふんぞり返る浅蜷掘
其上（かみ）の八景絵図の浅蜷掘
如月の風吹くばかり潮は澄み
如月の波は一途に寄せるのみ
手間暇を掛けて拾ひし海苔これっぽち
八方へ海苔が流れて広き海
海水に入りて手掘りの浅蜷掘
場所替えて大き浅蜷に恵まるゝ
春の潮上げてゐりやら引いてゐるやら
沖を見て放心の態浅蜷掘
干潟いま没せんと波四方より
この辺と腰を下ろして浅蜷掘る
豊漁は神のみぞ知る汐干狩
二三箇所試し掘りして浅蜷掘
莫迦げたる潮吹を又掘り当てゝ
潮吹と昼月の彩相似たり
肘張りてマメコブシ蟹股潜る
少年時代、マメコブシ蟹をまんじゅう蟹と
韓信の股潜りかやまんじゅう蟹
五ツ六ツ面目の立つ大浅蜷
汐干狩潮干調べて小潮の日
上げ潮に最後の干潟今没す
上げ潮の気配石蓴の濃くにほふ
沖を見てゆけば石蓴に足とられ

属目

雛祭孫の塗絵も賑やかし
吾がかぶり振る人參を妻買へり
木瓜の他みるものも無き庭景色
鳥雲に性懲りもなく戦すか
つつかけを靴に履き替え土筆野へ
萬の芽朝日浴くゆきわたり
伸び縮む鳩の瑠璃首春隣

今もある文房具店丁字の香
有袋類お腹抱へて日向ぼこ
山茱萸の黄が開け放つ朝なりき
あぢさゐの臙脂の芽立ちによきによきと
かさつける指もて開く二月の辞書
三寒は籠り四温は用足しに
徐々に徐々に徐々にぬくもり萬の芽
琵琶湖模す不忍池鴨啼けり
家中を経巡る孫は春の虻
山茱萸の寡れ夕日にあはれまる
膏葉を忘れ湯に入るのどけしや
膏葉が効く筈の齢むめの花
潮浴びぬ馬刀掴み取り仕損じて
懐旧 乙鱸海岸
ころりんと渚に海鼠波枕
水明り余寒明りち云ふべきや
椿林その奥行の何處までも
いい加減降り来て椿又ここに
山茱萸の明日恃む彩奔放に
ここ数日カーテンコールめく四温
英勝寺過ぎてしばらく丁字の香
観梅は日のある内に巨福山
雪柳一枝挿して仏ごと
紫荊何か企てゐるごとし
妻の為日永の煙草の煙逃がす
ふらここは幼馴染みのごと親し
寒さ来て寒さにめげず猫柳
手狭なる机の上の冬日差し
図書館の沈丁の香に囚はれて
お客用スリッパ新らしサイネリア
単色にそれでゐて蒼帯ぶる鷺
全て遣り果報は寝て待つ春は未だ
寄る鯉の灰いろがかる冬の暮
梅の上に聳ゆ富嶽も相模ぶり
桃どちのけふは節句と云ひ交し
ここに来て天気足踏み柳の芽
はくれんに天気昼から大崩れ
接骨木のまだ控え目なその太芽
昔の味バレンタンのチョコの味

横須賀の玄冬の濤高からず
尚早と決めてかかれり探梅行
一団に追いつく鴨のびりっ尻
春休向う三軒こどもごゑ
隙間風講釈しても始まらぬ
風きつく崩れ出したり鴨の陣
彼の寺の梅探らんと思い立つ
丁字にほふ径小脇に新刊書

番外

伊予柑に手の脂ぎる五十代
牡丹園二箇所に分けて火桶かな
ぽんぽんだりあ昔は良かった風に咲く

をさな子の兔のフード春近し
三春の鳥を翔たせて一の春
鶺鴒来て梢にこそつく霜日和
重く翔けはた軽く翔け春禽来
村巡りおでこ温もる桃の花
鯛釣草うらはらの世を明るうし
先陣を切つて梅咲く切通し
桃源郷錯覚の桃額の上
山茱萸を黙って見をり今朝のあめ
山茱萸の蕾と竝ぶ雨しづく
山茱萸に音なしの雨濡れ飛石
裏路地に洒落た洋館花ミモザ
百日の水栽培のヒヤシンス
山茱萸咲ききな臭き世を遙かにす
黄梅や磴の磨り減る瑞泉寺
巖冴ゆる二月の朝比奈切通し
ものの芽に朝昼夕と親しむも
日溜りの梅林を出て風の中
三寒を遠ざけ庭のクロッカス
雛祭桃は咲き季違へずに
鳩は皆地べたに降りて杜四温
紅梅の綻び初めて雛の息
紅梅に放心頭（かしら）大きひと
春なれや土搏つ雨の返点
朝昼のめりはりつけに春の鴟
海棠を支ふ丸太の鼎組み
禅林の白梅にして荒削り
一息入れ腰立て直す浅蜷掘
ドットコムそんな言葉も目借時
クリームを塗りたくる冬始まりぬ
をととのし梅にことしも遣つて来ぬ
晚白柚あきれ顔して見てゐたり
咲き登る桃に青空空けにけり
二ヶ月のカルキのほふ湯を薄め
雑木林まさかの大島櫻かな
大島櫻風は響きて青空に
拾ふものありて二月の庭雀

一箇買ふデコポンの尻瑕皆無
腰上げし冬廉売りの駱駝のシャツ
まんさくの隙間だらけの花愛す
風の日は雲呑が佳し水っ洩
どん底にゐても擡ぐるふきのたう
鼻つけてかほり好みのあらせいとう
心臓の温み掌移し賓頭廬さま
冬ざれの天道虫は能く歩く
三寒は稀に四温はちよくちよく来よ
生々しき原稿の文字残る寒
手も足も出ぬ寒中の片付けごと
腑に落ちぬ古草の径途中まで
潦それみよと云ふ寒さかな
ふらここは青天井より垂れゐたり
春めきておおらかにみる校正ミス
青木の実ひとりぼっちの山中に
日が伸びぬ造酒屋の古看板
中七の下を考え花菜徑
徒長枝を逆さ掴みに笹子かな
質（たち）悪き風邪はやることはやること
山菜萸の燧の黄花庭に飛ぶ
結び目のほぐれ万作黄を展ぐ
四温のあと否応もなく三寒来
うらうらと照る日や鴨の遠ざかり
山菜萸と起居共にし無為無職
宝籤春の陽気に乗せられて
長閑なる日和と顔に画いてあり
山菜萸のつぶらな蕾機の熟す
下積みのあくせく知らぬ桃の花
直に聞くことは佳きこと桃の花
三寒の合間の日和息吐けり
海髪そんなに干してどうする庭日向
啓蟄や元の地番を覚えゐて
山菜萸をはじめ庭木の皆律義
春水の韻き佳ければうちたたき
厳寒の頃をさぞやの木瓜の花
衰ふ足の補強を兼ねての探梅行
轉るはまこと少さき禽にして
轉りのこころで一吋休止の態

向き変えて鴨の頭すすむ景色かな
ふるると鴨の水浴び春浅し
様になる細枝目白を止まらせて
細枝あり浅春の禽放ちては
うぐいすに止まれと梅の枝を頷ち
春禽の小さき頭震ひ何啄む
とてかんと工事再開春の草
税務署の暖房なんとかならぬかや
万作のいつ咲きていつ花了ふ木
映るもの枯れ一色や鴛鴦の水
長閑ならぬ税申告の足し引き算
メタセコイヤ対生の芽のにこにこ
犬ふぐり右に左に車輛音
枝揺する風の大島桜かな
水中にさみどり芦の芽もこもこと
餌採らんと脚を屈伸春の鷺
陣解きててんでんばらばら春の鴨
春水に映れる鴨と風の翳
春水に時折映る風の翳
支那万作風に緩みの見え来たり
沼よりの細き風筋鴨の啼く
一つ木に春禽三羽向きまぢまぢ
水ひろびる鴨の黒点うち延べて
餌を漁る鷺の腰つきのどけしや
腹の鳴るもう昼どきや犬ふぐり
桜草次男起き出す日曜日
枝先の揺れ愉しめる春の禽
真裸の並木囀り初めにけり
尻立てゝ餌を捕る春の鴨霧中
磯鳥の連れ立て翔べる石蓴のうへ
ころんと海鼠転がりをりし浜青天
二つ程拾ひ海鼠の黒奴
流れ海苔波間に躍る二月尽
流れ海苔疾風に掬ふ水つ洩
朝の濤崩る渚に石蓴の香
ぬばたまの黒長靴に石蓴踏む
山茱萸が咲いて初陣めける日よ
金盞花いろの太陽天気図に
浅春の横にひろがる濤の音

浅春の真白き波高からず
春の波流れ海苔載せどんぶらこ
浅春の渚あをさをふんだんに
大潮の干潟現れくる砂のいろ
干潟今顔出すところ騒ぐ波
花杏ほのとこちらの眼許まで
浅春の濤のたっぷんたっぷんと
山菜萸咲く笙・箏の樂あらな
大島桜青空展け風鳴れり
名園の松の薦焼き春近し
日本海魚尽しの冬の旅
庄内の夜をくつくつと番屋鍋
鶏冠海苔「はあるが来たとおもふべな」
潮水に海鼠生かして風鳴る日
晩酌に海鼠おだぶつする夕べ
桶底にねんぶつ称え海鼠待つ
海鼠切る手許いやはや五十妻
塩振って海鼠おたけび潮吹ける
俎の上の鯉否海鼠切る
二月は海苔拾ひなどして精出す日々
ぞんぶんに海苔拾ひして手近な海
二月尽波滔々と海苔運ぶ
引き揚ぐる若布二月の日の色に
護謨胴着潮光りして若布搔く
海苔採の身を削ぐ風に水っ洩
海苔拾ひこれでなくちゅあ腰に魚籠
海苔採の完全武装耳袋
春なれや海髪に取り付く藻もありて
河豚食べて夜は温泉番組漬け
万作はお天道様のおかげ咲き
山菜萸咲く家に朝日呼び込んで
万作や今日も何處かで工事音
花まんさくちりちりと日に温む膝
山菜萸のなまなま蕾む昼の雨
山菜萸に嘘のやうなる日の続く
山菜萸のぼんぽこぽんと弾み咲き
蕾解きあぢさゐ奉書開きの葉
孫へ

ぢぢばばの家の桃咲き汝（な）の節句

晴天三日節句を待たず桃ひらく

桃・杏・李一本づつ庭に

薄膩（あぶら）伊予柑一箇食ぶ額に

津軽三味線引つかき回せばふぶく雪

文机に辞書は定位置二月尽

空っぽの洋菓子袋二月尽

浴衣の胸ちよとかき合はせ扇蝦

囲炉裏瑕煙管なんぞもこの爐辺で

お茶碗と同質のおと寒卵
能く笑ふ桃には輪郭線の無く
王道は山茱萸の黄を貫きて
海鼠に髯あらば弁士にうってつけ
海鼠に小便そんな愚行もしてみたく
口つぐむ海鼠質せば一理あり
手当つれば胃の辺で哭ける海鼠とも
海鼠啖らひしことの證しの暖（おくび）とも
海鼠食べられて暖となり出づる
汐干狩時間を暫し棚あづけ
潮吹に親方風を吹かす馬鹿貝（バカ）
頭搔く海鼠なんぞも見てみだし
若布汁これはやっかい吸ひつく蓋
若布汁熱きを啜り生きかへる
海鼠食ふときは鳩尾暗くして
ウォーキング使はぬ筋肉使ふ冬
常の日といふもいささか応ふ寒ン
海鼠切る頭（かしら）らしきを右に向け
寒椿なら実時の彼の墓域
石鹼の泡（あぶく）よく立つ春は来ぬ
春は未だ浅く塔婆の前のめり
種あかす手品などみて目借時
手品にも芸風ひらひら春めく指
山茱萸は淡きを通し月のはな
ちり紙の山や二月の屑籠に
巻きゆるく日永の遺伝子・滑り台
海鼠ひとり黙りこくって何に耐ふ
輪切りにす海鼠土管のごとき腸
指さしてこれが海鼠の中の首領（ドン）
乾上りて浅蜷の渦と海苔の粗朶
海鼠噛む顔を四角に三角に
海鼠噛む歯がまだありてあほる酒
拾ひ来て今日の糧とす海苔・若布
冬萌えは底に揺らめく藻草にも
二月二十八日の海苔酢に浸す
硬直の酢のもの海鼠勘弁な
酢海鼠に錆つく顎を使ひけり

海鼠酔に漬ける殺生いたしけり
これやこの身につまさる海鼠の腸
晩酌の箸に海鼠のコツと触れ
酔海鼠食ぶ残る齒全て動員し
酔海鼠のこれはいけないこの硬さ
こんなにも硬き酔海鼠閉口す
酔海鼠に顎の運動いちにつきさん
活けるなら桃には備前酒徳利
瞬けば瞬き返す春の星
星々にこころは飛んで春の穹
ぞくぞくと家建つ町の春の星
万作の鉤十字（ハーケンクロイツ）靡かせて
ヒトラーの雄辯万作前にして
我が鬪争（マインカンプフ）読み止しの眼を万作に
出張の思い出雛も飾りけり
豆雛に倒れ易くて金屏風
節句まで小出しに咲けよ庭の桃
浅蜷に砂海鼠には何吐かさうか
潮上げて足指浸すほどの潮
わが腸の一部になれる海鼠とも
鴨の水脈やがて平らな池の水
点りそむ春の灯節句前のあめ
人参煮る桃の節句をあさつてに
余寒なほ山菜萸の粗衣なぶる風
このところ海鼠倣うて黙しをり
突き立てしシャベルにしとど春の雨
観念し海鼠の吐ける泥の量
飴・絵本小物集めて節句待つ
日の射して無難なる景二月尽
小物いろいろ殖えし雛を飾るかな
在宅といふ身金魚に何處か似て
べべ濡らす如雨露遊びもたけなはに
桃にこにこ節句日和となりにけり
大海鼠無理難題のごと置かれ
山菜萸咲く一気呵成の日なりけり
酔海鼠となり果てし身を箸に懸け
伊予柑の香の染む指と気づきけり
凹む顔見たさに海鼠硬直す
一寸だけ射して二月の日の退く木

心がけ多くを望まぬ海鼠とも
山茱萸に日はまだ粗き洗濯物
裏返し海鼠の何だこの突起
海鼠の脚あらかた疣に退化して
赤海鼠裏側見られて仕舞ひけり
洪さとは恰好よさとは山茱萸咲く
熱海まで見にゆくことに寒桜
その声価大いに疑問麦こがし
同床異夢冬の花火を俱に見て
棚引けるさんしゅう雨を烟らしぬ
花桃のおたふく美人笑ひづめ
家が建ち町がごたごたして陽春
さんしゅうの持ち味曇れば曇る形（なり）
疎と云うか密と云おうか花さんしゅう
風の中小粒浅蜷を掻き集め
海苔採の見ゆる浜辺に顔出しぬ
まだ顔の寒き日向を歩みけり
のどけしや平たく生きて平たき句
彌生にして開花予報の走りなり
蝮の道思へば遠くへ来たもんだ
春北風が嘘のやうなり明くる日は
四温来りて金魚の水替え日和かな
房総と同じ温とさ金盞花
花菜畑おおかた四角とくに菱
略式も略式雛飾りけり
雛納め済みたる部屋を通りけり
山茱萸の何處かに師の目見通す目
フレバーティ薔薇の季節にまだ遠く
人間も木石の裡春の蠅
止まらせてなまあたたかき春の蠅
蠅の子の触りたくなるもの数多
飛んだとて行方限らる春の蠅
春の蠅ちちんぷいとぞ消えにけり
春の蠅元へ戻ってをりにけり
日が陰り金魚のための取り替え水
ヘリコプター飛来パンジーうち震え
さんしゅうの花呼ぶ冷えにしゃんとせり
移り気な花壇の主何植うる
このところデージーに凝る花の主

蒔きしもの忘れぬやうに札を立て
くちばしの黄色い鳥とだけ答ふ
春昼をきうと年とる魔法瓶
さんしゅゆの花了ふ翳がよぎること
さんしゅゆを朝夕眺め優劣を
関心のいつも外（と）にあり花さんしゅゆ
焼諸の皮にほふことにほふこと
風の日の山菜黄よりも日の弱気
寒鯉の鱭あほりたる水玄（くろ）き
人參は三月のいろ煮て和えて
どぶろくの底を浚ひて二月尽
春はまだ浅く洗面器の桃いろ
三寒で片づけられぬけふの冷え
松前漬筋ばる烏賊に鍛えらる
どぶろくの空壇眺めつゝ独酌
人參をこりこりと噛み龍（たつ）の年
人參をとらねば生活習慣病
馴らされて人參が出るあゝまたか
人參も三度三度のご飯哉
やわき人參年寄り扱いされてをり
酒尽きてほろ酔気分でみる雛
暖房の最後のふんばり籠る部屋
花桃のみんな素直な枝束ね
継ぎ目あとしかと桜の苗木かな
鼻冷えて来ればさんしゅゆ暮れ放題
ブラウンシチュウ手間暇掛けて残る寒
啓蟄の孫もしもの電話口
失敬し大島桜の一輪挿し
どうみても昔話の雪景色

大楠山など

傘壊す春一番が吹きにけり
春の鳶陛下お成りの御用邸
枯蔦のぐるり取り巻く御用邸
藪つばきなど見て秋谷一丁目
潮気濃き風は浜より寒桜
寒桜ほゝうと腕を組みながら
寒椿いきいきと山深まりて
きさらぎの風吹き上げて山鳴す

風荒む山垣間見す藪つばき
麓より大分硬き芽山桜
山径は風鳴るばかり壺すみれ
前山は雑木立錐もがり笛
磯山にとんびの女ごゑ雛の日
名ばかりの弥生に入りし椎の山
陸（くが）指して雲脚迅き花菜畑
油菜のもう花つけて二三莖
木々きしる如月の風去らぬ山
風のなすままに古巢の揺さぶられ
古巢ありこんな風にもずり落ちず
毛むくじやら羊齒打つ寒雨生々し
料峭の眼鏡に跳びぬ雨飛沫
大楠山やよひと云へど荒む風
山中に自動車で来てよもぎ摘み
春先と云へど落木降らす山
壺すみれ山風聞くと耳澄ます
春一番吹きし翌日春北風来
浮寝鳥水を平らに平らにす
能長閑松の廊下の類にて
ものごころつかぬうちから飾松
途中から寒海苔拾ひに転向す
古巢ごと吹かるゝ灌木大き揺れ
沖時化て風鹹し金盞花

三浦半島 芦名 淡島様

雨風の身支度をして雛流し
雛流しぼつんと来たる鹹きあめ
お宮守る椿に雛の海揺れて
磯椿時化に首振る淡島さま
雛流し催す宮の五百椿
雛流し神事肅々椿の宮
雛流し神事おだやかなる口上
雛流し神事の挨拶おだやかに
目鼻立よき雛乗せて流る舟
雛流し椿の宮の直下より
細れ波ひひな流されゆくわいな
二十段ほど磴降りて雛流す

白波の横一文字雛流し

今日揚がるシコ新聞に包み苞
雛流し淡島さまは海に向き

胡桃割る小部屋のなかに控の間

中空に澄めるくわりんに日のくわつと

節句過ぎ桃の花散る土荒し
建長寺裏のぼたぼた椿かな

はちきれん許りのはくれん切なき性

庭雀三寒の朝もたらしぬ

老耄の山茱萸と見られるていつも

啓蟄や耳搔き棒の塗剥げて

帝王学山茱萸明り取り込んで

鶯餅五十がらみの男買ふ

啓蟄の煤がかかる家見回して

万作やはたきは疾うに廃れたり

さんしゅゆや栄光の日々無き者に

啓蟄の部屋を違へて妻と吾

をとつひの三寒の尾をまだ曳けり

古武士めく鯛の額に薄日差し

身をうち延べ汝がこころねの電気毛布

あらよつと電気毛布に滑り込む

電気毛布温め呉れるし妻に謝辞

静電気パチパチさせて初湯殿

干潟の間浅みの潮に風の紋

漣なし上げくる春の潮四方に

遠浅の海と聞くさえ春めきて

干潟現る順序がありて海松の海

なまくら出刃もつて寒海苔叩くかな

海苔拾ふ腰を大きくおよがせて

三月の鳶岬鼻を司る

春草の根の確かさを引いて止め

鳶の影枯篠伝ひに遠ざかる

大島桜ここを小島とおもひ咲く

さんしゅゆの大いなる威の中すすむ

三月菜真上の鳶がつと流れ

貝殻の交じる磯畑三月菜

雛流し祝詞むにやむにや某命（みこと）

住人の替はる界限地蟲出づ

団子虫出づれば春とおもうべな

焼諸屋もう来ぬ町を抜ける風
さんしゅゆの陽気振る舞ふ中にゐたり
燕来て水も柳も新橋いろ
桃咲いて今日も隣家に笑ひごゑ
かさこそと乾ける耳に竹落葉
山下りてお寺に出づる竹の秋
俯せに水仙の葉の荒るゝまま
水仙の果つる花より葉の窶れ
汚れなく果つる水仙とぞおもふ
足下より常黒髪の雛流す
菜種咲く頃の河津の涅槃像
暖房に朝からずっと入り浸り
喇叭水仙荒くれ風に向き咲ける
鹹き波飛沫とぶ豆の花
紅うるむ三月の枝水平に
二ヶ月の木々垂直に垂直に
好き嫌ひ直らぬ齡はうれん草
いつものこと後で知らされ春一番
猫柳だいぶ陽気がよくなって
水仙のかほり切つたる葉っぱかな
名ばかりの春嘯いて反れる月
春三日月風が募ればぎすぎすして
三寒のどつちつかずの夜半の月
庭土に滲み込むまでの春の水
水遣つて元氣が出たとチューリップ
初孫の来るたび覗く鉢金魚
気兼ねなきことが取り柄の毛糸編み
好きな時好きな事して日の永し
感激のこゑの極まる花菜の黄
どうでもよいやうに山茶黄なりにけり
異変とも思へる陽気猫柳
窶れもう取り繕へぬ花さんしゅゆ
喪に服すごとし二月の蜜柑畑
春寒く日光返す木々の枝
老人の指図けむたし花貝母
梅遅き巨福山の一塔頭
こちよき春の土踏みだんご虫
があがあと家鴨が鳴いて水草生ふ
くすりとも笑はぬ罌粟の固苔

いまさつきまでゐし鷲の神隠れ
偏屈な蓑虫薦被て晩年へ
干潟の穴かはるがはるに蟹の貌
飛石の山坂越えて蟻の道
嬌声や花菜に溺れゆく女
衣づれの虚空をよぎり竹落葉
つれづれや花種蒔きて半日了ゆ
大空に雲を敷き詰め涅槃の日
涅槃寺薨の負へる雲薄し
避寒とは恰好よすぎる夫婦もの
蝮の道兎も角道を急がねば
ただ赭き寒緋桜の中すすむ
啓蟄の亀現る苔のほひして
花過ぎの剥落とめどなかりけり
犬ふぐり一族郎党引き連れて
観桜のころ放てり水の上
手に負えぬ時間に加え日も伸びて
ぺんぺん草奏づる風が出て来たり
孫戻す家のしよんぼり春燈
晩酌に暈鯛を焙る煙
樹下にゐて大きな鴉花鎮め
しろつめくさ真つこと冷たかりけるよ
肅々と雲を募らせ睦月富士
春草の伸び一わたりしたりけり
花菜の虻花粉運んで黄昏まで
彩どりは京劇の赤寒桜
一切のこゑ断つ竹林残る寒
花菜畑夕日漣なせりけり
夕花菜金閣の金ンもってせり
ちぎり絵めく遠花菜畑山腹に
残寒の竹林に首さし入れて
行楽の虫むずむずと日向ぼこ
雛節句過ぎてても桃は咲き続け
三寒の昼餉おじやに腹が足り
土竜の死うすもいろを以てせり
相応の駱駝のシャツに着替え起つ
隈取の朝比奈現るゝ寒桜
山菜黄を朝昼晩に見て家居
まだ咲ける腐れ椿の名を負ふて

植込みを手取るやうに春座敷
斜面畑隙間を密に落花かな
だうもかうも天気外れて紫荊
雛の客孫より他にあらぬ家
雛壇のありし辺りをかい撫でぬ
道少し汚れて雨の花御堂
雨傘を開き出でゆく花御堂
雨冷えの喉をうるほす甘茶もて
残寒の湯呑は斯くも冷えをりて
山妻の海鼠食うたる高いびき
灌木は蔓に絡まれ冬百日
残寒の山辺なりけり鶯の笛
助さんの見得を切るこゑ水仙に
弥次さんの喜多さんのこゑ卵の花に
田畑（でんぱた）の廃れ枯篠迫る村
尻軽な花菜の虻とおもへりき
大風にうち負かされし水仙花
鮫鱈の腹据ふここが正念場
水仙の倒れし径のなほ続く
寒緋桜ここに止どむる日差しかな
浦の風あびせ倒せる水仙花
何處か身のそはそは花菜の照り返し
三月は不二を遠目の霞み月
土俗の花諸葛菜咲く磯長（しなが）の國
東国の諸葛菜咲く野に遊ぶ
なほ下りて口つつしむよ櫻谿
甚六に避寒は言葉だけのもの
恰好をつけて避寒の旅などと
蠅の子の気になるいちいちその仕草
散り止まぬ椿の宮に遊びけり
灌仏の日のゆれ藻草ゆれ藻草
湘南の海の日に通く古巢なり
海棠のえも言はれなき花あかり
押し黙り見居り花菜の虻の所作
寒緋桜明り浴びけり頭（かしら）から
犬ふぐり堤飾るを怠らず
花見客行き交ひ合へる身幅かな
海見えて風立ちやすき寒桜
被写体のピンボケ花菜ハレーション

花菜畑夕日二段に段差あり
花菜畑魂透くばかり夕日浴び
白木蓮白鳩千羽翔つごとし
はくれんの阿吽の呼吸咲き出すか
三月来だうといふことなき木々に
上からも下からも人花の山
花筵てふ大仰なもの持たず
腰下ろすところへ飛花の次から次
花の席あそことあそこ空いてゐる
この齢になりて春曉てふものを
愛らしき蒼からしてゆすらうめ
寒桜下照る径を下りづめ
見通して奥行のある花の山
よべ雨のありて痘痕の苗札よ
禽ごゑのひろがりすぼまり花の山
虫愛づる男の子に蠢くだんご虫
涅槃図のたるみを見せず堂の幅
のほほんとしてゐし鴨の残されし
そんなことしなくても水温みけり
この在のいつか廃れて針供養
地に落ちし百の椿に残る寒
パツク入り露の臺とは心外な
藪椿こんなところで径途切れ
大根を洗ふ機械か人気なし
水仙のかほる埧塙に何時入りし
私有地の柵内旧知の諸葛菜
すき焼きを食うてこの冬了へんとす
落椿一箇蹴りても百残る
風ながら日当たる径の壺すみれ
鮫鱈のごてごての肝買ひ控え
鮫鱈のうすきび悪き肝覗き見
三分ともたぬ漢の日向ぼこ
かうしてはおられぬ性分春一番
啓蟄のどんでん返し啖ひけり
山茱萸の影白壁に日は傾く
上り下り径のつかえて花の山
多すぎる海鼠の数に買惑ふ
花菜晴れ漁師は漁に精を出し
花の中喚声縫うて滑り台

料峭のそれでもぼちぼちハーブ園
寒緋桜早目が佳しと聞きて来し
三月の空ゆく雲もなかりけり
灌木を三月の栗鼠生剥ぎに
沖ゆくは遠洋船か花菜畑
寒桜帽子をとれば花明り
寒桜緋のマフラーを巻き直し
熱海まで足代かけて寒桜
休日の校庭ひっそり桜の芽
公園の日暮れの水仙しよんぼり咲
三月の海いちだんと広やかに
油菜にもがもが云うてもぐる虻
花菜の虻頭の中で鳴ってをり
寒緋桜うすうすかほり初めにけり
花虻の音聞く限りきかん坊
金盞花畑あちこち轉々す
花菜に日さんさん虻は精出して
うち霞む富士三月の雑木のうへ
水つ洩日の落ち際の富士を撮る
太腿の辺りがたゆく桃の花
底冷えの富士より冷えを貰ひけり
雪嶽の富士風を切る雑木の枝
あしび咲く磯長（しなが）の國の磯山に
相模野に春を奏でて酒匂川
そくばくの風立つが見ゆまんさくに
もくれんの相も変わらぬ硬苔
近くみて遠目のこち花さんしゅゆ
伊予柑に指をかほらす湯浴み後
どんがめが水底蹴りしか泥けむり
蜜柑食ぶ孫の頬っぺを膨らませ
戸田人にさよりの揚がる海があり
冠雪の富士の高みに宿木も
二三秒程みて次の花菜へ虻
花菜の虻いちにち出でず黄の領域
一こゑを懸けて通れり寒桜
鶯の藪の中より甘えごゑ
助っ人の数の内なる溝浚え
春泥を跳び越す身形（なり）十字なり

ユスリ蚊の柱ぐらぐらたわいなし
キンクロハジロ

これは粹小さきちよん鬚ある鴨で

紙のたも大破それでも金魚追ふ

卑猥にして愛すべきもの蘇鉄の実

蘇鉄の実卑猥卑猥と囃されて

ちよこなんと形ばかりの松飾

風はまだ冷たけれども初ざくら
をととひのさくらがふつと泛かびくる
さきほどの花も佳けれど此も佳し
立ち去れず一本故に此のさくら
人気なきときをさくらのさかんなり
ひとびとは立ち去り櫻は残りけり
桜大樹でんと根を張り岩のいろ
くさぐさの吹きとぶ花の雲に入り
たまに人来る花のもと目白ある
樹ほとりにあらたまり聞く花の鳥
さゝずりのありかは花の奥の奥
枝移りして花の鳥こゑ大きく
狼藉を論すものなき花の枝
鳥入れて俄然華やぐ花の山
花鳥翔つ枝の辺りが光りをり
花の山騷がしにくる目白かな
傍観の夕かたまけてちるさくら
初ざくらとは人の眼をほしいまゝ
人ごゑが近みさくらがそはそはす
観桜のけふは少しく風ある日
てのひらに飛花を掬へば浮き立つ彩
桜ありそを愉しめる苑のあり
静かにも花の山攀じ扱て下る
もくもくと湧きて在所の桜かな
鳥が行き桜の風の通り道
桜の谷木五倍子の谷とうち過ぎて
花房に鳥が割り込み花の昼
朝ざくら芳しきとも芳しき
すいと来てこんどは小柄花の鳥
諸鳥を迎え送れり花の枝
上野より戻り湯舟に花気分
吉次の國陸奥迄下る桜花
掛け湯して鼻唄出づる春の昼
循々と桜の下る秋津島

嫩葉萌ゆ牡丹の芽から幾日目

犬ふぐりの一つ一つに日の片鱗
名ばかりの春の中天鎌の月
やおら腰上ぐるごとくに春の地震
一通り見せ呉れ目白の軽業芸
鳥雲に隣の家の宗旨かな
ぼちよぼちよと水の流るる芹田かな
高気圧張り出し春を先送り
さんしゅゆの黄を振る舞ふは善意めく
三月の青空広かれども寒し
寒鯉は密に疎に水注ぎをり
天神の絵馬にいろいろありて東風
枝があるばかり花鳥の居ずなりぬ
丁字いま風に白ける花となり
たまさかに用ある市役所沈丁花
何彩を出すか椿の丸荅
花さんしゅゆけふも一日暮れにけり
多羅の芽に引つ込み思案の空模様
この谿の露と覺しき無人店
新芽噴く鳶がのさばり出す森に
猫の恋人目なんぞにおかまいなく
おかまいなく猫が仔を産む季節なり
さんしゅゆに思ひ当たるは鉦のいろ
アユタヤの寝釈迦の金ンや夕花菜
その花期を全うしたるすもも哉
美雨
だだこねて如雨露手にする水遊び
啓蟄の迂闊な角力とりにけり
腕振りて横綱入場春相撲
三椏に月は二十日の仮面とる
昼月に海月末路の身を晒し
金澤文庫
弥勒寺金澤山（きんたくさん）の野びる玉
野びる玉舌に残りし味噌の味
武蔵ノ國久良岐群の野びる摘み
野びる玉ピリと鎌倉武士の世も
野びる玉いざ鎌倉のこゑ飛ぶ中
時頼公土器（かわらけ）に味噌野びる玉
鴛鴦の水金砂銀砂をまぶすごと
花薺月琴の音を蔵したり

絶滅の目高は虹に紅遺し
節分草節分草と尋め歩き
申し送り引き継ぐごとく三春へ
田の畦を同行二人雀の槍
北上（ほくじょう）の春こだはりの旅したく
鴛鴦装う晴着は大正浪漫風
天麩羅にからりと揚げて春告げ草
花なづなペンペン草の名を厭ひ
犬ふぐり集落のごと点在す
ここに又オオイヌフグリの一集落
春の水窪みに落ちて翳生めり
よく徹るこども等のこゑ水草生ふ
かりそめの春水の翳生れては消ゆ
且つ結び且つ消ゆ水輪糸柳
きらきらとさざなみ日和遠見の鴨
風荒く日もまた粗くいたちはぜ
冬かもめ魚鱗かがやく海の果
料峭の鴨飄々と行き交うて
一端が吹き煽らるる鴨の陣
風に伸び風に縮まり鴨の陣
芦の水流れ来たりて芹の水
梅・万作・桃・山茱萸と順に咲き
三椏に口数殖ゆる東慶寺
お國柄能く出て日向水木かな
日向は愛敬土佐は朴訥花水木
三椏は真言を秘め山辺の寺
玉と降る雨や苔の海棠に
何考えぬるやら貝母の胆の裡
武士（もののふ）の肝見るとき貝母とも
雀斑は内に秘めおく貝母かな
はうれん草湯の上に湯を継ぎ足して
伊予柑を傍らに置き剥きもせず
缶詰のアスパラ玲瓏として余寒
雪柳泡のごとくに花挙げて
雲多め気温は低め彼岸入り
水底のいったい何處に蝌蚪の紐
春はこどものごとく三色御飯かな
上気して湯よりあがれる春の人
指葉して遠ち見遣る春の人

書店にて本を漁れる春の人
懐紙出すしぐさ床しき春の人
けふは口つぐみ過ぐのみ春の人
とする間に手に当り逃ぐ春の蠅
だんだんに桃に李に遅朝日
啓蟄の力士ころりと裏返る
鯛吊草祇園囃子を奏でたり
風落ちて春は名のみ雲間の星
糸柳大風任せ開戦報
さなくさき戦が間近焼鳥（シシカバブ）
中日の病院で聞く開戦報
春分の道うらうらと大佛まで
春分の巷佛花の目に付く店
国是問ふ論議喧々つちふれり
日本國平和平和とさくら咲く
バスといふ函に揺られてお中日
江ノ電や膝に彼岸の花包
お彼岸の花売り靈園最寄り駅
春分の花舗の馬穴に柵挿し
春分の日を粉に浴ぶる磯あそび
落椿ここを下りれば稚児ヶ淵
江ノ電の裏径ゆけば花きぶし
同じ道戻る弁天祀る島
接骨木は葉によいこらと島巡り
壺焼や流るゝ鳶を横目に見て
要注意フジツボ爰に磯あそび
ふじ壺の礁引込む春の潮
とよもする春潮フジ壺群暎々
江ノ島の岩屋より出て遊び舟
岩屋みち岩場岩場に石たたき
お彼岸の数珠玉きぶし日の載れり
烏山椒棘のピカピカ彼岸入
島椿往きはよいよい石段道
紅椿に頤を突き出す石段道
藪椿石段相継ぐ島の径
島にもう一つ宮あり貴つばき
春の鳶こゑも切なく開戦報
この沖は砂地なればと鱧釣れり
椿咲き音曲の神祀る島

夜は椿落つ島ならん岩屋みち
乗合船椿の浦を後にして
やけに鳶多き江ノ島彼岸晴れ
鳥雲にアラブで開戦鳶舞へり

金澤文庫 称名寺 裏山

蝌蚪の國腕白どもに伏せておく
平民の蝌蚪屯せる共和国
群れたがる蝌蚪を離れてゆく蝌蚪も
百万遍蝌蚪尾を振れば田蛙に
湿地帯蝌蚪の集落あちこちに
蝌蚪の國引っかき回す棒探す
屯せる蝌蚪や民族自決主義
蝌蚪居るは居るは蘆芽（あしかび）自治の國
朽葉に鼻突っ込み居れる蝌蚪もあり
テロ目論む蝌蚪も居らんと思へりき
萍のしんとみどりの一帝国
萍のみどりの落下傘部隊
萍の隠蔽工作始まれり
山鳴りをいちにち聞きて二輪草
空鳴って辛夷の開花促せり
二輪草けちけちせず咲きにけり
桜祭先づ雪洞が吊されて
萌ゆる羊齒月日を経たる五輪塔
一条のしろがねの水芹を摘む
弥勒寺の裏山たんぽぽ浄土かな
たんぽぽの二輪打ち合ふ鉦のいろ
轟々と山風高し鼓草
雲間より射す日たんぽぽ甦り
雑木揺り辛夷揺り山渡る風
裂帛の気合いを込めて辛夷咲く
耳聾す風天空を花こぶし
山渉る風ある限り花こぶし
いたちはぜ黄花を凌ぐ葉のみどり
芹摘の中間に耐え切れずして起つ
不粹なることはすまじき二輪草
枝先のその又さきの初ざくら
称名寺開花予報に誘はれて

塀の蔦瑪瑙いろなる一、二葉

この家の婆は健在白木蓮

大方の家の鉢植え桜草

花どきの母校二代目尊徳像

桜草殖えに殖えたるこの界限

郵便受鳴る音のして木瓜の昼

働かぬ月日積もらせ紫荊

諸葛菜要らぬ戦争引き起こし

連翹に庭掃き了へし腰伸ばし

いろいろな容器砂場に花の昼

紫荊道理引っ込む戦して

紫荊嘘で固めた戦して

紫荊是非ややこしき戦して

戦勝報くたらくたらと紫荊

紫荊一方的に非を難じ

身勝手な戦の行方つちふれり

失敬をして来し桜の一枝咲く

慕ひ寄る金魚の動き春は来ぬ

植込みの中に頭の見ゆ春雀

あさつてが横浜開花予想日よ

土筆野の小道しろしろ続きけり

曇日のうす光りして翁草

蟹の目は縦に上げくる潮を見る

中日の夕日片頬ぬくむ程

突っ張って突っ張り勝ちぬ春角力

これやこの日向水木に目を細む

てらてらの力士の腹や蓬餅

春場所の土を噛んだるはたき込み

春場所のとんだ所ではりま投げ

隣人と垣のはくれんうち仰ぎ

雪柳佛花と決めて幾年月

春興や橋の上から見遣る景

淡々と咲いて真砂女の紫木蓮

二三日風納まらず紫木蓮

はくれんを煽り覚ませる風鮮し

中日の夕日眩しや顰め面

春円き円き帆立の味なりき

蛙の子在所の雨の味見かな

金澤八景シーパラダイス
水族館体験コーナー春休み
体験コーナーきゃあと人手を怖がる子
口許は馬づらはぎ風熱帯魚
海豹は鼻水飛ばす浮上して
進化して日永らっこの足は鰭
人生の一駒孫と海星瞻る
暗幕の中や珊瑚の蛍光体

ヒザラガイは英名「古代ギリシヤ人の肌着」
解説も長閑にバタ焼きヒザラガイ

爆撃の体勢に入るエイを見よ
風船をつつくイルカのシヨーを見ぬ
魚氷に上りアザラシの皮下脂肪
アカマツカサ

浮袋鳴らす魚とよ篤と見る
驚きのテップウエビの衝撃波
オニダルマオコゼ口中ちよと動く
大ムツと顔突き合わせ老い目前
孫と瞻てナマコ忍者の黒装束
大海馬背びれひらひら昇天す
リーフイーシードラゴン遊歩の迷彩服
見つめられ居りて箱河豚ぽつとせり
ヤリ鳥賊の前進後退春近し
晩酌の肴に欲しき鱒泳ぐ
ラッコの髯フセインの髯相重なり

大岡川 観桜

川風に桜ゆらゆら水ゆらゆら
桃いろの携帯電話花のもと
おしどりに吹雪ける花の余り風
川があり花あり風あり佳き街なり
花吹雪ころろ忙しくなりにけり
花冷えのしてキャラメルの包紙
お花見の飴は薄荷に限るなり
大岡川桜十町風十町

ごたごたと桜の間に屋台店
さぞかしとおもふ川辺の夜のさくら
川端の夜風に変ず花の風
ペット屋におたまじゃくしのおたま哉
渦中にゐて桜詠ふはやっかいや
花吹雪散り込む川に鯉の泛く
花の川行き来の鴨の頭の茶いろ
亀浮かれおよぐ桜の大岡川
花の風川の真中を通りけり
花嘉す鴨に雀の仲間入り
川沿ひに植えし桜の真つ盛り
花吹雪雪洞にまだ吹き足らず
花にくる鳥の名頓と知らぬなり

弘明寺観音 観桜

五、六駅電車で行きて花見かな
初花に響かせ電車の始動音
板東のお花見がてら札所寺
赤塗りのひょうげた仁王花の昼
分葱買ふ弘明寺観音お膝元
初蝶来風裏返し裏返し
初花に通へるものに風と禽
花揺らすものはと見れば風と禽
花に禽しばし憩へる禽に風
トンネルの真上の桜咲きにけり
この山の一押し桜咲きにけり
人絶えて勘三郎の花の山
花を瞻る角度がありて真つ昼間
花あふぐ光の加減大事とも
真昼間の桜の間を日の透きて
割烹の桜のいやに艶ぽくて
竹の葉散る奥へ奥へと魅せられて
私有地の桜の奥を覗き込む
山間の桜眺めて枝鴉
頂の風筋知りて初ざくら
喫水の真水のひかり初ざくら
見晴し台あれば登りて花の雲
花の山風に時報の流れ来て

枝の間花がだんだん混んでくる
見慣れたる景とは云へど花の頃
老人は首の体操初ざくら
見下ろしの墓所真新らし花きぶし
棒切れで地図を描ける花の許
禽ごゑのすんとも花垂れ木五倍子谿
飴玉を持ってふらりと花の人
朝櫻懐滑る番鳥
少年のバットの素振り初ざくら
花の数頤で数えて初ざくら
泣くことがお仕事の嬰（やや）花のもと
花堤空缶一つ流れくる
花堤顔を晒して風つめた
花堤ぼちぼち立ちぬ屋台店

堀川縁黒子あやつる小蝶とも
家桜日本家屋は斯く在りたき
破れ傘鉢植えにして事なき日々
破れ傘陽気佳ければ浮かれ出て
番傘をそろそろひらく破れ傘
一郎のママはでぶちゃん新学期
わが馴染む乙女椿は古きはな
ぼつねんと一字二分咲き里桜
馬好きに桜花賞あり花の頃

夜通し降り桜洗ひてあがる雨

外人墓地シドモア女史

ポトマック河畔に花を贈りし女（ひと）

野毛花見

犬ずれの紅毛人来て花の山

花愛づる毛唐の大首横濱絵

毎日のお花見日和我に在り

横濱の花を観るなら掃部山（かもんやま）

花見酒野毛のやまからのーおえ

紫荊戦はアラ一の思し召し

ラッパ水仙君がは代をは起立して

職員室桜大樹を前にして

傘の柄を持つ手のつめた初蛙

町中の墓所の桜の満開に

花びらの雨に張り付く木馬の背

鶉の雨滴零せる朝ざくら

花吹雪く苑に目覚めの風太郎

この静寂（しじま）破るものなく朝ざくら

にはたずみ雨水清浄朝ざくら

花屑に夜雨の翻弄思へりき

早起きの散歩の余録朝ざくら

花どきの選挙公約森抜けて

花吹雪どつとばかりに子守の背

花屑に風そろそろとたちつてと

花吹雪風の無理強ひしたりけり

水うまき豆腐もうまき花の頃

乙女椿孫の如くにめんこくて

称名寺赤門抜けて花吹雪

ざりがに捕餓鬼大将は世に絶えず

曇日の腹裏返し蝌蚪泳ぐ

蝶に蹤き仁王門までだらだら道

落椿展観幕府滅亡史

称名寺鴨も花見と洒落にけり

シテのごと鯉罷り出づ涅槃吹

平日の花見の出入反橋より

うす光りして春草のこんもりと

吾もまたその気になりて芹摘みぬ

ひやひやと俄芹摘み夕づける
海棠の花どき大佛までの道
花人は今様本田平八郎
腹這ひて子の写生する花筵
をばさん等手弁当提げ花の山
鳥よりも人よく遊ぶ花の山
花愛でて渉れる山の山桜
分葱生ふぺんぺん草に凌がれて
はたきなどばたばた春の楽器店
花房を啄む鳥の身をひねり
名にし負ふ花の名所の鳥見塚
通勤す駅構内の桜見て
ごたつける駅のホームや新学期
精米所横よりのぼる花の山
花きぶしするする鉄塔渉る山
諸葛菜ひよろりと町内掲示板
梅は実に田浦梅林傾斜地区
送電線谷を跨ぎて花きぶし
谿底にいささか遅れ花きぶし
花吹雪たけなは県議会選挙
桜より木ぶし旺んな谿を攀ぢ
石造り厠が立派花の山
幹から枝枝からはなびら桜描く
横須賀港
花の山銀鼠艦船見下ろしに
焼鳥のうす煙り上ぐ花の山
花吹雪弾みつけるに太鼓欲し
亀の首花の風巻（しまき）に遭ひにけり
役者めく花の下風受けゆくは
かるめ焼きなど賞味して花の人
落花浴び池の亀さん何處へゆく
初桜雨の光を交えけり
山ざくら長けて深山の鳥呼びぬ
花の蜜くすねに来たる大き鳥
木苺が咲けば信州佐久のこと
花木苺雨はしとしと降るものぞ
花どきの雨は哀れをさそひけり
うち煙りうち煙りして花の山
桜狩きのふの山よりけふの山

しつとりと庭に朝来て白山吹
枝のさきまだ咲く余地のある桜

俳人

蝌蚪（かえるこ）をカトと端折るは不精也

火の島を真つ向にして椿東風

何事かまくし立てたり花の鳥

朔日の榊あがりき龍神宮

靄がかかる谿に降り込む桜雨

亀鳴けりやうやう主旨が伝はりて

山桜路肩が濡るる朝の山

蔦若葉磨き込まれし芸に似て

艷姿折り返し見て山ざくら

口々に彼岸ざくらの淡きこと

颯爽とおしどり水辺の桜過ぐ

朝ざくら詠めり定型響かせて

ぼんやりと飛花の行方を眺めをり

山腹に桜いっぽん花ごころ

身を絞りサーブ放てり花の昼

酔どれが起ちて危なし花筵

赤銅いろ陸上トラック落花馳せ

当苑のヨコハマヒザクラ花付け頃

雀の槍によきと英軍墓地の芝

轉りは四方の森より英軍墓地

薔薇低木墓石に添はせ英軍墓地

花屑のすこし汚れて権太坂

老桜並木団地も古りにけり

高台の花は遅くて街はるか

養花天選挙合戦空ラ響き

花吹雪小公園を突っ切りて

選挙公約花に向ひて誓ひをり

母老いて都忘れの濃きを好む

落花の斑夕風が吹きはじめけり

子が翔たせ鳩が止まれる桜の木

靴箱に親子靴入れ入学式

飛花の風萬の落花のうへをゆく

疎に蜜に落花社の樹間かな

走り根に当たて落花転び馳す

昨夜の雨いささか花を減じけり

夜桜組莫塵・苞抱え乗り込めり

花くわりん宙を伝ひて日のあゆむ
紋白蝶風の迷路に迷ひ込み
空鳴って風吹く日なりくわりん咲く
花掲ぐ茎のさみどり二輪草
鉄（くろがね）の朝礼台を落花馳せ
飛花の風辺りが透けて見えにけり
飛花ひたすら風ある時も無き時も
常節漁解禁の報高知より

しゃぼん玉曼陀羅絵図の丸と丸
しゃぼん玉前より多き玉小さき
しゃぼん玉吹けば何かが膨らめり
飛石に当りて壊るしゃぼん玉
初孫のちやほやされてしゃぼん玉
しゃぼん玉いびづを孫の笑ひつゝ
一つ一つが三千世界しゃぼん玉
まんまるに直りいびつなしゃぼん玉
のびる玉摘みに天気は尻上がり

鷲掴み落花放してみせにけり
恰幅に負けて桜を詠みにけり
地を翔つて対角線に花の鳥
かうなつてしまつては天に任す花
わるさして桜おかしくするやまひ
どういへばいいのか彼岸ざくらの彩
松風公園一雨毎に花うすれ
海浜の松の中なる桜花
近在の山の手選りて桜狩
花蘭けて山茱萸は葉を押し広げ
破れ傘坊主山より移植せり

二輪草半開き空うす曇り
何處ということなく出歩くさくら季
さくら薬炎むら下火となりにけり
夕冷えは地べたを伝ひ葉ざくら季
真似て嗅ぎ牡丹に顔をそむける子
葉ざくらの下風の来る其処に坐す
紅牡丹白妙牡丹のあとに嗅ぐ
花・薬と見せ場作りて葉桜に
さくら薬降る変哲もなき社
ちよぼちよぼと櫂が芽吹きそめにけり
芍薬と牡丹只今牡丹のとき
牡丹のほとりに暫く車椅子
雀らと緑陰の風愉しめり
芽吹く葉の隙が粗くて春櫂

庭木の桜いっぽんで足る家なりけり

普賢像桜咲かすはこの家か
花過ぎの雀をなぶる春疾風
もう一つ愉しみありて八重桜
後発の八重桜咲きはじめけり
お花見饅頭顛頂にしかと焼印付し
初花に風雨一泡ふかすべく
海手より鹹きかぜさくら咲く
山手線花の見頃は短かくて

馬鹿貝採る凡夫凡夫の大干潟
大馬鹿貝これはなんじゃと除けられぬ

馬刀貝の豎穴住居密集地

馬鹿貝の抜き取らるとき鳴きにけり

調理法馬鹿貝採に訊ねけり

馬鹿貝の他採れなくて中休み

馬鹿貝が採れると云へど大は稀

馬刀貝を仰天さすべく穴へ鹽

浅蜷掘めぼしきものは乏しくて

砂吐かすアサリつつめる春の闇

腰伸ばし目と目が遭へるあさり掘

平日のをんなこどもあさり掘

手つかずの浅蜷掘り場の無きものか

遠縁に話及びぬ浅蜷掘

汐干狩吾もガニ股姿にて

手応えのこれは大きな縞あさり

セルロイド製の玩具の浅蜷搔

老夫婦孫を挟みて浅蜷掘

しいしいする孫に干潟の広かりき

重装備してあさり掘現はるゝ

ガニ股で歩いて汐干狩戻り

水鉄砲浅蜷に砂を吐かせをり

紫木蓮ばらつと来さうな空模様

紫木蓮挨拶のこゑそこそこに

花まるめる雨が陽気に降り出して

黒文字の葉並び能くて即座に買ふ

桜薬降る公園に子をあやし

水道で洗ふ稚児の掌さくら冷え

住宅地一帯古るぶ紫木蓮

あぢさゐの佳き葉並びに雨るんるん
うまごやし子規の教えし野球して
尋めゆくを心づもりの八重桜
初孫のぬつと顔出す雛の前
雛あられ妻は両手で受けにけり
幔幕が落とされ桜葉降りぬ
曇天に重く来て立つ八重桜
穴出づる蟻を石もて塞ぐ孫
脂っ気抜かれ戻れり汐干狩
指挟む大馬鹿貝の糞力

大道芸祭囃すやオツペケペー
野毛山の虹を背に佇つマイム像
のれん出す野毛飲屋街虹立ちて
野毛山の春の夜浅く辻楽士
春の夜の角帽浅く辻楽士
まるめろの若葉は雨に重く来て

艇庫よりスワンを運ぶごとヨット
胡葱の味噌汁投票済ませ来て
観覧の西洋タンポポサッカー場
初蛙いくらなんでも早過ぎる
春の蛇どきんとする内消えにけり
春の蛇間が悪さうに消えゆけり
春の蛇片脚宙にはつたと眇る
うす膩泛く春の蛇正視して
穴出づる蛇に山径輝けり
穴出づる虫の裡なるだんご虫

町内の銭湯に温泉場を恋ひて
馬刀貝の如き一物春の湯屋

鉢飼の金魚くすねし猫通る
三毛猫に金魚奪られてつまらぬ日
髪刈って花過ぎの日の白面
ぼうたんの咲けばついつい嗅いでみぬ
ぼうたんをついと嗅いでは離る人
チューリップ園児そろそろ通る頃
チューリップ彩数の殖ゆ小公園

チューリップことし五つ色奮発す

三成の言い分聞かう白山吹

花くわりん夜間飛行の灯のちらちら

桜薬降りて大道芸の街

春荒れに大道芸の危ふかり

春疾風植えしばかりの黒文字に

花過ぎの確かなる夜を薄着して

嘯むに佳し山と盛られしはうれん草

うなばらの納まりかへり春の暮

俳諧は言葉の海の汐干狩

端午の湯踵きれいにあがりけり

野遊びに女はあてにせずおこ

この道に老いてますます竹の秋

黒文字植え清明の水遣りにけり

刈り株の間亡骸の蝸牛

販売機春夜連なる灯の區劃

かたつむり殖やす青葉の雨が降り

思ひのまゝ歩いてみるもの遅桜

春なれや見上げてチャンチンモドキの木

観賞の人選ばざりチューリップ

一木に戻る端山の桜の木

方円の落花一夜に極まれり

青葉影石の鳥居へ石垣へ

葉ざくらの風に戦いでみせにけり

葉ざくらといふには早き下つ風

葉ざくらを急がす風と覚えけり

啓蟄の舗道に矩形の家の影

杜覆ふ青葉の諧調宜しけれ

花どきのあと薬降らせ忙しき

聞き居ればうちの子だけがと万愚節

サイダーの季節となりぬ泡追ふ目

グラス越し孫の泡追ふソーダ水

かちやかちかと浅蜷の酒蒸春の宵

大道芸春の日永く肉桂飴

野菜もの苗植えて水撒くばかり
屈強な婆の腰つき汐干狩
黒干潟やがて日暮れの波被る
遠浅の往きはよいよい遠干潟
満月を海に沈めてカガミ貝
カガミ貝縄文人も化粧ひけむ
青柳は烏天狗の舌の彩
壺焼の代用品のツメタ貝
馬鹿貝（ばか）の舌雀の舌に酷似して
塩たんと振りかけ待てる馬刀の穴
塩啖らひびっくり仰天馬刀半身
塩啖らひ素っ頓狂な馬刀の面
夕されば白波の立つ黒干潟
暮れ際海坊主めく黒干潟
浅蜷縞流行りの縞もありぬべし
大干潟潮上げて来て人引きぬ
中潮のけふ馬鹿貝の吾が漁場
汐干狩豊漁豊漁と波鳴れり
馬鹿貝の舌を使ひてのけぞれる
汲み潮に馬鹿貝の口うつすらと
馬鹿貝のときに饒舌鳥の舌
馬鹿貝の潮を淫らに滴らす
もよほせる尿意なだめて汐干狩
黒干潟波嫺々と寄せるなり

道北

往路

春暁の眠気まだあるエアポート
春暁の機首振り上げて振り上げて
降り立ちて気温差十度春セーター
松前に桜前線陸す
残雪の陸路北上ふきのたう

男山酒造

酒水は万年雪水男山

男山酒造雪山正面に

大酒樽ごろんと根雪に醸造所

和寒・士別・名寄・音威子府

和寒（わっさむ）の田んぼに春の夕焼け水

ぽんぽんとふきのたう出づ和寒町

和寒の防雪林横ふきのたう

足なまる車中に薄荷飴しゃぶる

粗土の士別の田畑（でんぱた）ふきのたう

つんつんと青穂秋蒔小麦の丘

田に残雪畦に萌えたつふきのたう

福寿草咲かせ和寒レストラン

樺林埋む雪塩狩峠越す

ごろりんと除雪の雪の河川敷

白樺の用途かつてはスキー材

露萌えて大雪山よこんには

雪に色正して秋蒔小麦なり

ヤチダモの根方の雪の痩せてをり

秋っこは秋蒔小麦

秋っこと土地人の云ふそのみどり

雪痩せて赤エゾマツを佇たせけり

水楢・朴・トウヒ雪解の山中に

雪嶺を前にしにこにこ樺太露

雫してまだ雪中の鬼ぐるみ

町木はヤチダモ残雪うち敷きて

山林の裾まで根雪退いてをり

道北の残雪退いて里青む

ヤチダモのバット作りに励む冬

陸路北へ蝦夷山桜芽吹きもせず

谷地露の廻りじゆくじゆく和寒町

残雪と樺の道北内陸部

榛の木の芽吹きまだまだ天塩川

残る雪点在音威子府村（おといねっぶむら）

残雪は林間に透け天塩川

家ぽんと置いて名寄の雪間かな

林立の榛の川端雪解靄

ふきのたう根雪汚れて退りけり

熊笹の根方うるほす春日差し

こんな処流れて雪解の天塩川
地名当てクイズ車中に春旅さき

浜頓別

ほっこりと樺の根廻り雪解急
浜頓別牧場にぼちちり残る雪
ブッシュの間雪埋む水鳥観察小屋
白鳥の蹠一見ビニール製
隙見つけ白鳥降りるクツチャロ湖
押麦を白鳥に捲く男かな
白鳥のかうかうかうかう嬢ごゑ
白鳥の波風任せふかふかり
白鳥の黄の鼻づらに雪解風
白鳥のあれゆく浜頓別のそら
春光の一際強く白鳥に
湖に天使の階段白鳥来
湖に脚をハの字に白鳥降る
啼声のかにかく白鳥一万余
白鳥の産毛転べり湖畔みち
風煽るまゝに白鳥羽根畳む
皆若く白鳥撮りのテレビクルー
白鳥の録音係こゑ拾ふ
白鳥の放送中継風の音
目の子算ざつと一万コハクチョウ
麦糸芽宗谷本線とことこと
ふきのたう単線の音小刻みに
白樺に残雪痩せて中頓別
道北の四つ葉牛乳ひいやりと

猿払

活ホタテ食ぶ眼が優しくなりにけり
春暁の牧場一円朝日射す
春は曙牧場の牛乳いと濃かり
残雪へオホーツクより朝日影
猿払村蛸突きの海前にして
猿払の牧場の窪み雪解水

牧場に丘あり窪あり残る雪
牧場の湿地に榛の木の芽吹き
牧場の小丘の草のやや青む
ホタテ漁頓に旺んに富める村
猿払の村宮牧場雪しざり
猿払の貝殻置場春荒れひゆう
猿払のホタテ嚙みしめ夕餉膳
鮭トバでちびりちびりと男山
夕餉の膳ホタテの紐に四苦八苦
調理法指南ホタテは縦に切れ
ホタテ揚げ焼いて刺身に宿の膳
さるふつのホタテの活身湯上りに
猿払やホタテ処のホタテ愛で
猿払の海に海豹浮上して
猿払の熊笹金んに春入日

オホーツク昇る太陽筋子いろ
ヤーホイヤー春の朝日子躍り出て
目の限り北オホーツク春大空
海猫呑みていまオホーツク暮れるべく
浅春の雲を送りてオホーツク

宗谷岬

あざらしの腹の上なる春入日
サハリンより寄せて春寒日暮波
サハリンを閉ざす厚雲鳥雲に
サハリンの方へ向ひてほっけ船
古草を靡かせサハリンよりの風
最北の地の丘なだれふきのたう
春浅き宗谷丘陵鳶翔たせ
朝波に揺られ揺られて蛸採舟
宗谷岬熊笹叢に無垢の雪
土匂う宗谷丘陵なだらかに
村民は荒稼ぎして蛸御殿
一興と宗谷岬の蛸を食ふ
蛸漁の漁師の家はかたまりて
蛸で食ふ村の家並の皆立派
丘青みプロペラ風車風貰ふ
海猫の糞間宮林蔵どんの背に

最北端岬のブッシュに残る雪
熊笹に残る雪見て最北端
目に付くは残雪宗谷の風岬
目に青むもの見ず宗谷の風岬
海猫止めてくるぐる宗谷の日暮岩
蛸茹でて湯気洩る食堂最北端
旧海軍望楼掠め鳥帰る
厚雲にサハリン封じ蛸茹でる
海猫の糞皚々宗谷暮れんとす
蛸獲るや最北端の磐島
春の落日林蔵の背に廻る
曇天のサハリンの方海猫よぎる
熊笹に吹き付け宗谷の春嵐
風ゆるむ時なし宗谷の春遅き

ノシャップ岬

利尻雪富士望遠レンズに納むべく
みそ汁のぎんなん草が売り切れた
荒涼と野寒布岬の鱈干場
野寒布と宗谷の間の昼がすみ
利尻島霞もやもや引き出せり
春がすみ利尻は溶けてしまひけり
礼文なほ見えゐるところ春の雲
海豹の這い這いノシャップ水族館

礼文島

春先の礼文へ向ふ白き船
春鷗礼文近しと告げくるや
礼文航路左舷に春日差し込めり
春光に紛れて礼文忽と消ゆ
礼文島近み旺んに海猫の舞ふ
靄を来て礼文間近し海猫乱舞
春濤のうねり大きく陸（くが）近み
模糊と見て礼文の高みに残る雪
海猫高く高く礼文に入港す
レブンの名付く草々の島の春
雲丹井はむらさき雲丹や岬の茶屋
磯自慢礼文のウニを召し上げれ
鱈干し場脇抜けのぼる島燈台

リマン・対馬海流

岬青み二つの潮の合ふところ

カスベエは土地言葉でエイのこと

島巡りカスベエ干し場横抜けて

水芭蕉先づ咲きナチュラル・アイランド

すてきな島礼文さきがけ雲丹を食ぶ

島咲きの魁エゾノリュウキンカ

地酒酌み礼文をしゃぶる焼けほっけ

磯茶屋の沖に暖流雲丹を食ぶ

訛り暖かガイドは礼文高校出

ふきのたう島をまかなう発電所

堂々の居住ひ礼文の座禅草

村毎に一つ桜の小学校

雲丹獲れて礼文利尻の夫婦島

水芭蕉まなざし上げれば礼文岳

丘丘に礼文育ちのふきのたう

古草の間エゾエンゴサクの咲く

風鳴りてキバナノアマナの上空を

ほっけ干す風にがたびしする蚕屋

雲丹漁の島に二つの信号機

吊し干し助宗げっそり風岬

もうれつに風吹く岬の瘦せ干鱈

ふるふるとエゾエンゴサク風岬

春光のチシマクマザサチカチカす

キバナノアマナなど咲き礼文西海岸

一見の価値あり礼文のガンコウラン

雪止の鉄骨あらはふきのたう

黒がしらは鱈

昼食に煮付礼文の黒がしら

揚舟に残雪礼文船泊

長汀に鴉の骸残る雪

春の航摺まり立ちに船厠

あかあかの救命浮環も春の旅

救命いかだ春潮浴びて礼文行

春怒濤眼鏡の球に潮しぶき
どどんと左舷に啖らふ春怒濤
左舷搏ち礼文航路の春怒濤
まなかひに礼文近みて春かもめ
海上に雪化粧して利尻富士
深呼吸春の礼文の潮の香濃き
礼文沖ほっけを追ふか木っ葉舟
春の旅人船室に繰る時刻表
何すべく船室に坐す春の旅

カスベエは土地言葉でエイのこと
きゆうきゆうと海猫鳴く岬カスベエ干す
海猫・鴉ごちやまぜ礼文の風に乗
海猫退けて埠頭を占むる島鴉
潮青む礼文を皮切りウニ採漁
沖ゆくはりマン海流カスベエ干す
突き進む船首礼文は霞みづめ
海上に利尻全容霞切れ
挨拶を訛り長閑なガイド嬢
春日頷ち礼文利尻の夫婦島

サハリンはぼんやり糠漬けほっけ干す
利尻礼文春物語はツアーの名
島巡る丘又丘に樺太露
島山に春日を返す笹黄金
風傷みレブニアツモリ草の柵
蛸を採る沖合で合ふ二海流
鳥雲に島の古名はレブンシリ
右方よりリマン海流海胆を採る
春荒れに家のがたびしほっけ干す
岳樺呑み込む海霧の迅さかな
島巡りおしゃぶり昆布ふふませて
椴松に残雪滑り出しさうに
這松に海霧脚迅き礼文島
やお潮のさみどりの帯ウニ採漁
須古頓の風に揉まれてほっけ干す
利尻より礼文早めにウニ解禁
蓬草島中風垣巡らせて
須古頓の風はひゅうひゅう鱈を干す

春の日が照りて曇りて海馬島
須古頓の浪高からず海鼠漁
蛸漁のその大方は朝の内

さようなら春の礼文の赤燈台
海上に霞める利尻その内着く
海上を一路利尻へ春鷗
肉桂飴礼文霞に忽と消え
春光を鈍く放てる利尻富士
ウニを獲る島から島へ小一時間

利尻島

フェリーー追ふ春の鷗の数減りて
回春の島の奇岩のネーミング
回春の利尻高嶺は雪を置き
アトリ来て島は渡りの中継地
クマゲラが目玉のバードウオッチング
トレッキング旺んなる島海猫舞はせ
春彩どる弁天様は熔岩のうへ
アカゲラの木突き聞かん朝の森
海鷗見て宿は礼文に隣る島
あかあかの海鞘の水槽カウンターに
蝦夷警護会津藩士の墓にも春

どんとどんとどんと波乗り越えて・・・
春磯に時雨音羽の波の唄

海鷗去る礁利尻の波暮れて
海中の磐に弁天春夕焼け
春入日拾ひ昆布の磯染めて
雲間よりクロユリの葉に射す薄日
古草の間にキバナノアマナ株
雪解風利尻湧水ふふみけり
利尻暮れ海鷗一羽の黒礁
利尻暮れ海鷗ひっそり黒礁
干し鱈を金網囲ひ島日暮

利尻富士顛頂を覆ふ雪解霽

利尻富士眼鏡の球の雪解冷え
雪解靄お顔隠るゝ利尻富士
利尻富士だんだんしさる雪明り
春光に陵折り畳み利尻富士
春光をやわらかに投げ利尻富士
春光に襞の浮き彫り利尻富士
ガイド嬢利尻の万年雪にもふれ
利尻町春寒灯の入る赤提灯
父ちゃんと母ちゃん居酒屋焼ほつけ
活ホタテ開きほつけに地酒酌む
利尻メカブおじやうましよ当店は
利尻富士裾野青霞に突っ込みて
利尻富士高みうろつく雪解靄
都会もの利尻昆布を引っ提げて
島離る一団利尻昆布提げ
利尻富士裾野に数戸春の家
利尻富士頬切る風に春遅し
霞む中ふなばたよぎる利尻富士
北海の海鵜素っ飛ぶ利尻晴れ
利尻富士呆と仰げば頬撫づ東風
値の張って然り利尻の厚昆布
手当たり次第買い込む利尻の昆布店
榎松へ利尻富士より雪解風
苞被き古武士然たる座禅草
雪解風熊笹の根の大曲り
利尻富士面を厳しく座禅草
榎松の若木利尻の残雪に
みやうみやうと水鳥鳴けり猫柳
嘴太鴉（はしぶと）の巢作り羽毛ちよと啜え
鷺泊礼文で獲れし雲丹を売る
家苞に利尻ブランド厚昆布
昆布干場がらくた石に春日かな
目を遣りてチシマザクラの群生地
大空へ海猫を吹き上げ利尻富士
春光満つ礼文利尻の間の海
利尻富士皚々客船真っしぐら
利尻富士春さきがけの十六景
雪解の最中の利尻富士眩し
礼文見ゆ利尻の春の岬の先

浅春のデッキに立てば頬搦つ風
利尻昆布ピンからキリありどれ買はな
ひんからから蝦夷松にゐる朝の鳥
ほっけ干し北緯四十五度の島
黒百合は疾うに過ぎたる恋の花
黒百合の咲くに間のある風の島
こんなものチシマザクラのその身丈
駒鳥聞く利尻森林公園に
座禅草身形は仏くさき様
信心のかけら吾に無し座禅草
島山のハシドイの芽に小鳥ごゑ
ハシドイのもう芽を吹くか礼文見ゆ
利尻山岩間岩間の座禅草
利尻富士岬に春の明鳥
利尻富士真白に春光恰しや
陽春の利尻の花型街路灯
利尻去る太水脈の早や夏めくも
稚内・サロベツ
礼文より利尻へ横這ひ昼がすみ
サロベツの熊笹枯れて利尻見ゆ
サロベツの花咲く前の利尻富士
サロベツ原野芽ぐむものなく枯れ放題
はまなす枯れ利尻水道潮照り
利尻より礼文にかけて棚霞
稚内海上晴れて蛸突漁
春鷗舳先礼文へ向けて発つ
玲瓏と礼文をつつむ雪解靄
利尻に向くプロペラ風車枯れ一色
ぶん廻すプロペラ風車春荒れに
霞立つ方に礼文のうすぼんやり
春コート指さす方が礼文とよ
幌延
幌延のプロペラ風車春遅し
鳥雲にプロペラ風車二十八
小平町

春の塵鯨番屋の大囲炉裏

鯨来て浜を賑はすことありき

春は先づ鯨で賑はふ其処の浜

親方の漁場差配の赤毛套（あかけつとう）

まぼろしの鯨俵ぶに赤毛套

春の蠅天登雁村鯨漁場

板間冷え鯨番屋の漁夫寢床

春の蠅番屋の客に躓いて来ぬ

留萌

遠望の春は留萌の波の綺羅

ハマナスの芽のぼつぼつと暑寒別岳（しよかんべつ）

最北の海を見納め春コート

留萌川留萌本線春景色

留萌本線ピカピカみやまきんぼうげ

残雪をひたすら走る右手に海

玲瓏と雪頂いて暑寒別岳（しよかんべつ）

碧水・秩父別・旭川

土地人に教はり雪の十勝岳

又の旅夏と定めて富良野岳

畦青み雪嶺しざり秩父別（ちつぶべつ）

榛芽吹き神居古潭（かむいこたん）の川景色

蝦夷つつじまだまだ咲かぬ道北に

カタクリがいかにも咲きそな山あるぞ

帰路

富良野産ラベンダー入り線香とよ

氷点下四十一度てふクツキ

水馬二、三水撫で廻しけり

水中に睡蓮巻葉待機せり

山風に飛花ひらひらと厠口

穴を出づ大蛇に老人飛び上がり

花きぶし祇園囃子を奏ぶごと

朝ざくら沖に大島かすむなり

枝ぶり能く上下の間合山ざくら

源平桃夫指させば妻がうん

間引かれて明るさ半減富士桜
蛇穴を出でて水辺に遊べるか
更衣いちにちたいした事もせず

道北 拾遺

礼文の春さんざ鴨茅なぶる風

四月拾遺

散りしきる桜に添えな越天楽

模糊と見て桜のなかに末期の眼

樺巻きの筆策思ふ桜の夜

花筏お名残惜しや濠の景

桜には桜のおもひちりぬるを

こんなもの桜の齡（よわい）吾が齡

桜今おまえは何處の空の下

咲くからに命ぎりぎり桜ばな

すぐ散つてしまふのんきな桜かな

あいまいな光り放てり昼ざくら

ことし又花に感ずるもの詠ふ

その頃となれば花見に徒心

称名寺花も仲良く鳥も仲良く

海椽に咲くぞ咲くぞと桜かな

いまさらとおもふ人生花吹雪

花の枝峠のごとく撓ひゐて

花の枝の先まで先づは目を馳せて

海牛の波枕せる春渚

海牛は遠浅の海牧場とす

遠浅は今も干潟に波奏で

浅蛸掘一網打尽の重装備

浅蛸掘道具倒れと云うがあり

浅蛸掘浅蛸馴染の潮汲めり

潮吹が鳴いて潮時告げてをり

他人様（ひとさま）の馬穴覗くは浅蛸の多寡

浅蛸掘馬穴二つに面子あり

手応えはいつも浅蛸を上まはり

一人減り二人減りして汐干狩

薄闇に浅蛸のぞめきうしみつ時

浅蛸の管林立これから一仕事

馬鹿貝の塗り剥げたるはもう齡よ

昼採りて夕べに馬鹿貝（ばか）の三杯酔

馬鹿貝の半端なサイズ困るなり
青柳やきのふの続きのけふあした
馬鹿貝の舌を噛み切る前歯かな
この感触大馬鹿貝に他ならぬ
浅蜷減る海のさざ波聞きゐたり
垂直にそのまゝ馬刀の虚せ貝
縞柄も粹に浅蜷の月日かな
馬刀の死す砂の暗中いかばかり
砂抱いてか黒き馬刀の虚せ貝
馬刀死して今も飴いろのこる殻
馬鹿貝の砂吐かすこと一昼夜
海牛の頭上を跨ぎ浅蜷掘
試し掘り干潟のあちらこちらかな
海風の助けを借りて干潟現る
現れたての干潟に一羽白鷗
馬鹿貝に挟み込まれし指の先
素手素足真白に透けて汐干狩
潮冷えの尿意に勝てず汐干狩
足透いてもう上げ潮か汐干狩
汐干狩擡ぐ尿意を如何にせん
波を見て干潟踏みしむ白素足
潮濡れの手足わびしき汐干狩
貝を剥くその手使いて蠅を追ふ
皺くちや婆貝を剥くやら蠅追ふやら

庵原より宅急便で新茶着く
新茶届く清涼の風渡るごとく
新茶着く四隅角ばる包装紙
妻の出す夫婦茶碗に新茶かな
新茶淹る湯気の向うに送り主
腹中にみどりの粉（こ）散る新茶とも
新茶淹れ乍ら話の受け答え
あちこちで話脱線新茶のむ
注ぐ湯にみどりこきまぜ新茶かな
送り主曰く
茶摘み畑手が回らねばうち捨ておく

擲若葉そよ風絶えぬその高み
擲若葉して徘徊の杜深く

櫛若葉すんなり入れて鳥と風
櫛若葉待てば訪ひくる次の鳥
常夜灯櫛青葉の翳帯びて

根方からずいと見上げて夏けやき

夏櫛大樹にほへるおほらかさ

銅葺きの一字緑陰取り込めり

櫛青葉八幡の杜深うせり

櫛若葉して石畳冷え込めり

詣で人大緑陰に吞まるべく

緑陰に取り出して飲む烏龍茶

だんご虫交む姿も又団子

春日向だんご虫照り小石照り

行き当たる小石を嗅げるだんご虫

とある日の徘徊蟻とだんご虫

蟻迅くだんご虫又のそのそと

だんご虫わらわら出づる春の昼

山藤が見たくぶらりと山に来ぬ

山藤のうすむらさきにじやれる虻

前山の山藤を見て乗換駅

てらてらと山藤と消す強日差し

面白く剥く落なれば私にも

落を剥く厨に楚々と漂ふ香

落剥かせて貰ひしあとのすつきり感

私にもいっぽん剥けと落渡さる

蜥蜴の腹なんぞ見をればもう昼どき

蜥蜴の腹ひくひく時を計りをり

まなかひに出でて蜥蜴の間の悪し

猫見る間はたして蜥蜴雲隠れ

葉が動き目を付けられぬ小蜥蜴

都忘れ訪ふ人もなく花薄れ

都忘れ一茎二茎は一際濃く

長袖に妻は日焼を危ぶみて

昼の膳夏先取りの冷やし中華

チューリップだぶだぶ水浴ぶ水遊び

手を添えて新茶厚葉に微笑める
いつしかに葉桜そよぐ野毛辺り
風船を逃がしさうなる孫の手引く
第六感当り風船逃がしたる
青年の科白の稽古青嵐
このところ不精のかたまり鳥雲に
次の旅物色しをり緑の日
触れ廻る蠅がうるさくなりにけり
籠枕ことしの頭慣らしをり
硬くなる頭年々籠枕
籠枕風入る部屋に試し当て
ゴールデンウイク籠りて何すべく
葛餅をよすがに蒸す昼凌ぐべく
鱈茶漬け夏先取りの一趣向
干鱈など水に戻してとる昼餉
お茶漬けの干鱈がいいぞけふの昼
三つ葉などちよつと散らして夏料理
かたばみ咲くここらにありし引揚寮
人気なき昼を窺ふ蛇苺
筍の旬の字被らぬたけかんむり
緑陰に人馴れ貌の町雀
緑陰の雀とんとん走り根越ゆ
緑陰を黙々と翔け黒揚羽
鳩の発つ風の及べる緑陰は
緑陰の椅子の冷え帯び長居せり
擲若葉大揺れ小揺れ参拝す
緑陰に目を細め見る遠ち雀
緑陰をいつもの道順雀みて
この大樹青葉木菟など来ぬものか
緑陰の懐にして枝雀
緑陰の風よく抜ける木の間合
緑陰の大樹に隠れ遠ちゆく人
目の保養擲若葉を見上げては
緑陰の狛犬二頭に深む昼
ふらり来て緑陰を占む定位置に
擲若葉直ぐなる風に翻り
擲若葉戦がざる時疎しとも
大緑陰雀らしきが遠く跳ね

葉桜の揺れを脳裡に道戻る
葉桜の軽さとなりて道急ぐ
大船はシュウマイ匂ふ街つばめ
ここからは歩いてゆかう初燕
観音の胸元よぎる初燕
つばくらの運ぶ藁しべ一文字
一陣の風のごと来て軒燕
風ならぬ海道筋の軒燕
柏葉の包みゐるもの柏餅

大船竜宝寺

玉繩の一寺手広く芍薬植え
桐燦々一寺奥まり山負へり
芍薬の寺の芍薬畑植え
芍薬の寺と聞き来し桐も植え
一休の数ある頓知芍薬玉
剽軽な蕾み方して芍薬玉
桐の花寺の和尚はむらさき好き
花殖やす和尚の心根矢車草
矢車草直ぐなる風がすつと来て
矢車草ぽつりぽつりと寺訪ふ人
桐の花ぽかんと眺めぬしが去る
棕栢咲いて戻りの足の重くなる
これと云ふ取り柄無き寺棕栢咲きぬ
桐の花空のいろにも直ぐ倦みて
転がして暫し掌に置く桐の花
桐の花先代の顔もう忘れ

買物籠菖蒲の先が見えてゐる
風呂の水張りて菖蒲を泛べたる
葉菖蒲の香ごとくるめり新聞紙
たはむれに菖蒲をもって邪気祓ふ
神主の仕草を真似て菖蒲振る
菖蒲湯にざつと浸りて若返る
葉菖蒲の邪気祓ふ気にあやからん
気功てふ静かな体操子供の日
こどもの日あんばんまんのビデオ撮り
うんうんと孫から電話子供の日
釜利谷のをばさんの売る地のトマト

おすそ頒けさうよ小柴の子持蝦蛄

世間体一つ外せば冬青空

鶯の伝来のこゑ破綻なし

鞘走る音して竹の葉の降り